

# 市内遺跡発掘調査報告書 3

## 例　　言

- 1 本書は主に令和2年度に岩沼市内で実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 出土品整理、及び報告書作成については、2021年1月10日から3月10日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。また本書の刊行は国庫補助事業として実施した。
- 3 本書のトレンチ番号は現地調査時に付したものを使用した。また検出遺構の略号は以下のとおりである。

S B : 据立柱建物跡 SD : 槽跡 S I : 縦穴建物跡 SK : 土坑 P : ピット

- 4 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・武田裕光・兼田芳宏が担当した。執筆分担については下記の通りである。

川又 : 第II章2・3・4

武田 : 第I章、第II章1-B・C・7・8・9

兼田 : 第II章1-A・5・6

- 5 発掘調査の実施にあたっては、生田 和宏氏、斎藤 和機氏、白鳥 良一氏、太田 昭夫氏、千葉 宗久氏、廣谷 和也氏、村田 晃一氏をはじめとし、宮城県教育厅文化財課、各事業主、地権者の方々からご協力をいただいた。

- 6 土層、及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)に拠った。

- 7 発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。

## 目　　次

第I章 遺跡の地理的・歴史的環境	1
第II章 令和2年度の調査成果	3
1. 原遺跡（第15地点）	3
2. かめ塚古墳（第2次調査）	21
3. かめ塚西遺跡（第1次調査）	28
4. 中ノ原遺跡（第1地点）	41
5. 鶴ヶ崎城跡（第22地点）	42
6. 下野郷館跡（第31地点）	44
7. 鶴ヶ崎城跡（第23地点）	46
8. 鶴ヶ崎城跡（第24地点）	47
9. 鶴ヶ崎城跡（第25地点）	48
引用・参考文献	
抄録	

## 挿図目次

第1図 岩沼市遺跡地図	2	第25図 16トレンチ出土遺物	33
第2図 原遺跡（第15地点）位置図	3	第26図 19トレンチ土層断面図	34
第3図 トレンチ配置図・基本土層図	4	第27図 19トレンチ出土遺物	34
第4図 3・4・5トレンチ東壁断面図	5	第28図 20トレンチ出土遺物	35
第5図 1トレンチ検出遺構平面図	6	第29図 中ノ原遺跡位置図	41
第6図 1・2トレンチ出土遺物	7	第30図 中ノ原遺跡トレンチ配置図	
第7図 原遺跡（15地点）グリッド図	8	・土層柱状図	41
第8図 原遺跡（15地点）全体図	9	第31図 羽ヶ崎城跡（22地点）位置図	42
第9図 SB01 土層断面図	10	第32図 羽ヶ崎城跡（22地点）トレンチ配置図	
第10図 SD01・05・07 土層断面図	11	・基本土層図	43
第11図 SD01・05・07 出土遺物	13	第33図 下野郷館跡（31地点）位置図	44
第12図 SK01・02・03 土層断面図	14	第34図 下野郷館跡内の調査箇所	44
第13図 SK01・02 出土遺物	15	第35図 下野郷館跡（31地点）トレンチ配置図	
第14図 かめ塚古墳位置図	21	・基本土層図	45
第15図 かめ塚古墳全図	22	第36図 羽ヶ崎城跡（23地点）位置図	46
第16図 1トレンチ周壁土層断面図	23	第37図 羽ヶ崎城跡（23地点）トレンチ配置図	
第17図 4トレンチ周壁土層断面図	24	・土層柱状図	46
第18図 かめ塚古墳の暫定傾斜位置図	25	第38図 羽ヶ崎城跡（24地点）位置図	47
第19図 かめ塚西遺跡位置図	28	第39図 羽ヶ崎城跡（24地点）トレンチ配置図	
第20図 かめ塚西遺跡トレンチ配置図	28	・土層柱状図	47
第21図 1トレンチ東壁土層断面図	29	第40図 羽ヶ崎城跡（25地点）位置図	48
第22図 4トレンチ土層断面図	30	第41図 羽ヶ崎城跡（25地点）トレンチ配置図	
第23図 13トレンチ西壁土層断面図	32	・土層柱状図	48
第24図 13トレンチ出土遺物	32		

## 【令和2年度 調査体制】

教育長：百井 崇 教育次長：石垣 茂

生涯学習課長：沼田 雄明 課長補佐：菊地 英樹

生涯学習課文化財係 主幹兼係長：川又 隆央、主幹：武田 裕光、

技術主査：兼田 芳宏（神奈川県派遣職員）

塩谷 信幸、斎藤 新彌、渡辺 幹雄（会計年度任用職員）

現地調査参加者 川島 秀義（日本考古学協会員）※原遺跡第15地点

浅川 俊夫、近江 幸次、小野 一志、平 信弘、高橋 具市、玉山 俊彦、丹野 章、  
水沼 秋雄、新田 豊記、早坂 忠正、森 公利（岩沼市シルバーハウスセンター）

※かめ塚古墳・かめ塚西遺跡

整理作業専従者 菅原 健

## 第1章 遺跡の地理的・歴史的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR 東北本線と同常磐線の合流地点であり、交通要衝の地として知られている。

縄文時代の遺跡は、岩沼西部丘陵・長岡丘陵・二木・草木丘陵に存在する。調査が実施された遺跡は少ないが、鶴ヶ崎城跡【23】では縄文時代早期末～前期、山畑南貝塚【9】では縄文時代中期～後期、下塩ノ入遺跡【14】では縄文時代後期～晩期の土器が確認されている。

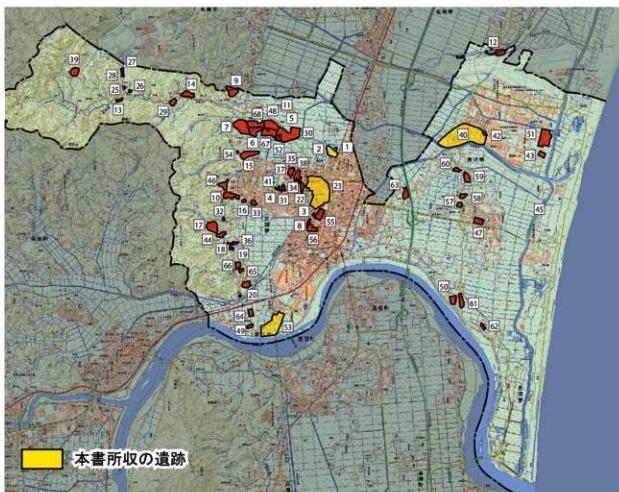
弥生時代の遺跡も調査が実施された遺跡は少ないが、鶴ヶ崎城跡では弥生時代中期後葉と考えられる堅穴建物跡を検出し、十三室式に比定される弥生土器、及び石庖丁などの石器が出土している。また朝日古墳群【37】では弥生時代後期の天王山式の土器が確認されている。このほか原遺跡【53】でも出土量は少ないが、石庖丁や土器片が出土している。

古墳時代では集落遺跡として北原遺跡【7】、熊野遺跡【15】で前期集落が、原遺跡では後期から終末期の集落が確認されている。高塙古墳は、岩沼市史編纂事業に伴い調査を実施した県指定史跡かめ塚古墳【1】において、くびれ部付近の周溝の底面から木製軸が出土している。横穴墓は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の凝灰岩層露頭面で多く造営され、丸山横穴墓群【3】、二木横穴墓群【8】、長谷寺横穴墓群【10】、平等山横穴墓群【16】、引込横穴墓群【31】、土ヶ崎横穴墓群【22】などで調査が実施され、各横穴墓群から須恵器、土師器、金属製品、玉製品、人骨などが出土している。

古代の遺跡では、原遺跡の調査が近年注目を集めている。これまでの調査では掘立柱建物跡、木材堆積跡、堅穴建物跡、溝溝などの遺構が発見され、また多数の土師器、須恵器などの遺物が出土している。特に世紀前半～後半にかけて機能していた掘立柱建物では、建物の主軸方位が正面位を強く意識していることが判明しており、須恵器円筒形の出土と併せて「延喜式」にみえる「玉前駅家」、あるいは多賀城跡出土木簡に記載される「玉前剣」が存在していた可能性が推量される。

中世の遺跡は、鶴ヶ崎城跡、朝日古墳群、上根崎遺跡【30】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【50】、丸山遺跡【55】および刈原遺跡【61】などが確認されている。このうち下野郷館跡では志賀沢川沿いで実施した調査において、在地の白古石窯跡群の製品を中心とする中世遺物を多数出土しており、中世段階の集落が河川沿いに展開している可能性が考慮されるようになった。

近世の遺跡は、現在の岩沼市の姿と大きく関係していることから多数の調査成果がある。鶴ヶ崎城跡では第1地点の調査が東北福祉大学によって調査が行われている。ここでは地鎮闇連の遺構として小穴に大堀相馬焼窯を正面で埋設し、これにかわらけで蓋をするように被せた状態のものを確認している。また竹駒神社境内遺跡【56】では、礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、神事関連遺構などを発見し、近世陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、金属製品、及び木製品が出土した。本調査により、向唐門の地下構造のほか、江戸期における社境内の空間利用のあり方を確認し、はじめて考古学的な手法により、これまで伝承、言い伝え、棟札、及び古文書などによって語られてきた竹駒神社境内変遷の歴史の一端が明らかとなつた。



第1図 岩沼市遺跡地図

表1 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	小山原古墳	古墳	25	八森古道跡	古墳・中世・近世	47	新田東道跡	古墳・中世・近世
2	小山原西古墳	古墳・古墳	26	八森古道跡	古墳	48	長崎北道跡	古文・古墳・古代
3	丸山横穴古墳群	古墳	27	御山古道跡	古文	49	南大崎古道跡	古文・古代
4	山田横穴古墳群	古墳	28	御山古道跡	古文・近世	50	南大崎古道跡	古代・中世・近世
5	御山横穴古墳群	古墳	29	御山古道跡	古文・近世	51	南大崎古道跡	古文・古代
6	村内古墳群	古墳・古墳	30	上田道遺跡	古文	52	貝田古道跡	古文
7	牛井古墳	古墳・古墳・古墳・古墳	31	山田横穴古墳群	古文・弥生・古代・中世	53	原道跡	古墳・古代
8	木ノ瀬古墳群	古墳	32	山田横穴古墳群	古墳	54	街ノ原跡	古墳
9	山田南貝塚	縄文・古代	33	新田古跡	古墳・古墳	55	丸山遺跡	古墳・古文
10	花谷横穴古墳群	古墳	34	石川山横穴古墳群	古墳	56	竹利神社境内遺跡	古文・古墳
11	長坂古墳	古墳	35	鶴見横穴古墳群	古墳	57	新田上道跡	古代
12	日向斎谷横穴古墳群	古墳	36	御山古道跡	古文・古墳・古代	58	南大崎古道跡	古代
13	大口遺跡	縄文	37	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	59	西土手遺跡	中世
14	千葉八幡遺跡	縄文	38	朝日遺跡	古墳・古代・中世	60	南大崎古道跡	古代
15	御野古道跡	古墳・古代	39	川越古道跡	縄文・古代・中世	61	川越古道跡	古代
16	半井山横穴古墳群	古墳	40	下川越古道跡	古墳・古代・中世・近世	62	高砂古道跡	中世
17	新川跡	古墳	41	白石環	古墳?	63	上川越古道跡	古代・中世
18	須吉上横穴古墳群	古墳	42	屋外路跡	古代	64	植道跡	古代・中世
19	相生古道跡	古墳・古世	43	二川環	古墳・古代	65	原道跡	古墳・古代
20	長井小智留跡	里町	44	新田前田跡	古文・古代	66	台原跡	古文・古代
22	下川越横穴古墳群	古墳	45	青森古道(木見坂)	近世	67	長崎古道跡	古墳・古墳
23	鶴崎古道跡	古文・古文・中世・近世	46	丹曾古道跡	古文・古墳・古代	68	上小河古道跡	古文・古墳・古代

## 第Ⅱ章 令和2年度の調査成果

## 1. 原遺跡（第15地点）

## A. 確認調査

原遺跡は、仙台平野南部域の沖積地を形成した阿武隈川下流域北岸の自然堤防上に立地する古墳、古代の官衙関連施設、集落跡である。これまでの発掘調査で大型の掘立柱建物跡や材木堆、土師器や須恵器、円面鏡などが発見され、文献に登場する「玉前駅家」、多賀城跡出土木簡に記された「玉前駒」に推定されている遺跡である。

対象地は遺跡範囲の北側に位置し、JR 常磐線の東側、原集落西側の畑地で、現況は雑種地となっている。

調査に至る経緯については、令和2年3月17日付けで宅地造成工事に関する協議書が提出され、同日現地調査を行ったが遺物の表採はなかった。工事の概要については、分筆し10区画の宅地として分譲販売する計画であり、竹等植栽の伐根、既存ブロック塀の撤去、上下水道配管の引込み工事を行うものであって、既存施設の撤去は新たな掘削が伴わないことから、遺跡に与える影響は軽微と考えられるため工事立会をするが、伐根及び給排水管布設部分は新たな掘削となるため、確認調査を実施する必要が生じたためである。

調査は令和2年6月10日より開始し、北側給排水管布設部分の東側に東西3m、南北10mのトレーナーを1本、中央に東西2m、南北9mのトレーナーを1本、西側伐根部分の北側・中央・南側にそれ



第2図 原遺跡（第15地点）位置図



空中写真（北から）

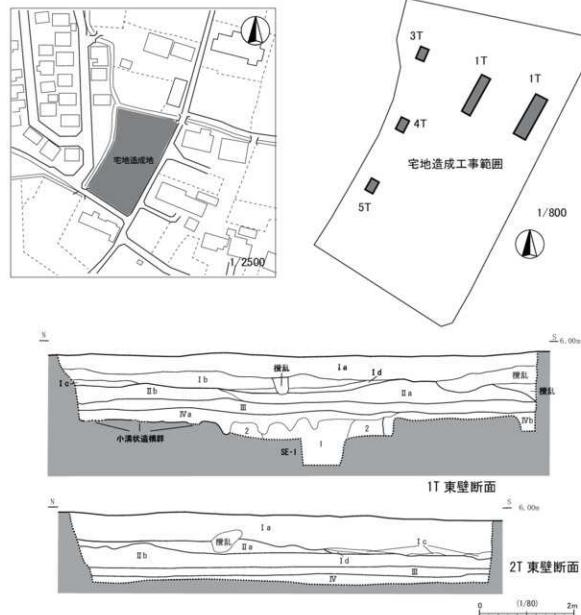
## 1. 原遺跡（第15地点）

ぞれ東西2m、南北2mのトレンチを設定し、重機を用いて表土を排斥して現地表面から130～234cm下までのI～IV層を、順次重機と人力によって掘削及び精査を行った。

その結果、1トレンチからは小溝状構構と井戸跡1基、土坑1基が検出され、IVb層からは焼土・炭化物と共に、土師器・須恵器の破片が出土した。また2トレンチからはピット1口が検出された。

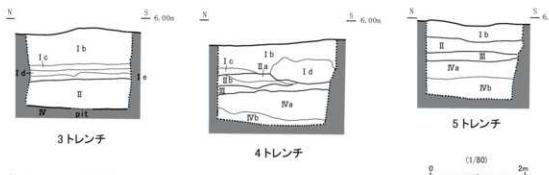
各トレンチの土層観察から調査地点の基本土層は、Ia層は灰白色砂礫で旧建物部分の盛土層、Ib層は灰黃褐色粘質シルトの表土層で、西側へ行くほど根の擾乱によりしまりがなくなる。IIab層は黒褐色粘質シルト、III層は黒褐色色土、IVab層は黄褐色砂質シルトで、何れもほぼ水平に堆積しているが、1トレンチ部分のIVb層は層中に炭化物・焼土粒を含み、下方は畝状に大きく乱れ井戸跡を切っている。

これらの構造・土層記録作業、写真撮影後の20日に埋戻しを行い、発掘資材を撤去して同日調査を終了した。



第3図 トレンチ配置図・基本土層図(1T東壁・2T東壁)

## 1. 原遺跡（第15地点）



No.	土色	土質	備考
I a	灰白色	10YR7/1	砂礫
I b	灰黃褐色	10YR4/2	粘質シルト 表土・炭化物を少量含む。しまりやや強い。
I c	暗灰黄色	2.5YR5/2	細砂 しまり弱い。
I d	暗青灰色	5B4/1	粘質シルト 酸化鉄分を含む。しまり強い。
I e	褐色	10YR4/4	粘質シルト 黄褐色砂質シルト粒を少量含む。
II a	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 田耕作土・黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや強い。
II b	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 田耕作土・しまりやや弱い。
III	黒褐色	10YR2/2	炭化物・焼土粒を少量含む。しまりやや強い。
IVa	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト 炭化物・焼土粒をやや多く含む。しまりやや強い。
IVb	黃褐色	2.5Y5/3	砂質シルト 酸化鉄分を含む。しまりやや強い。
1	緑灰色	10G5/1	粘土 酸化鉄分を含む。グリバ。
2	にがい黄褐色	10YR7/2	砂質シルト 酸化鉄分を含む。しまりやや弱い。

第4図 3・4・5トレンチ東壁断面図



2トレンチ全景(北から)

2トレンチ東壁(北西から)

## 1. 原遺跡（第15地点）



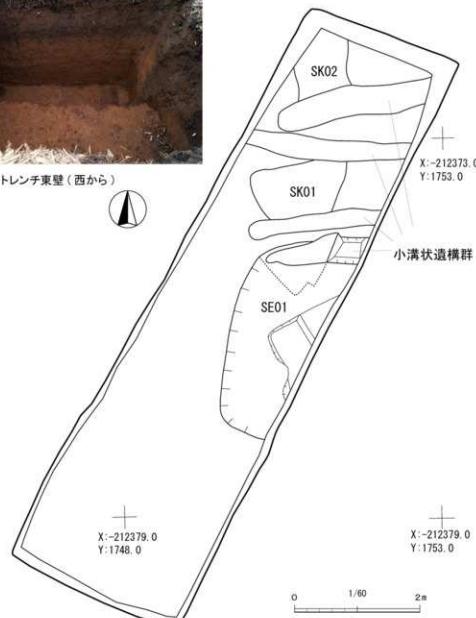
3 トレンチ東壁（西から）



4 トレンチ東壁（西から）



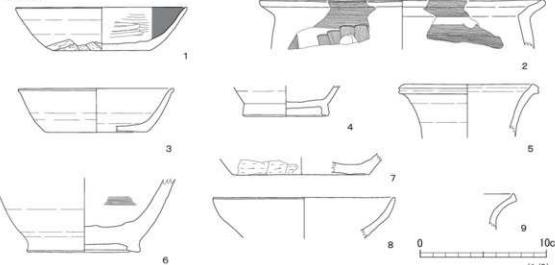
5 トレンチ東壁（西から）



第5図 1トレンチ検出遺構平面図

## 1. 原遺跡（第15地点）

1トレンチ



第6図 1・2トレンチ出土遺物

1・2トレンチ出土遺物観察表

番号	地名・場所	種別	測幅	外　面		内　面	寸　合	法量(cm)		年代表号
				外	内			口縁	底径	
1 サンブ	土師器 サブ	灰	ロコナダ・直筒形斜面中央後一部分ナダ・体部下端手縫 ル・カタツメ	ヘラビカキ・黒色焼成	全体約1.6m 約1.6m	13.6 (推定)	2.6 (推定)	3.4	1	
2 セイシ・北側	土師器 セイシ	灰	ロコナダ・ハラメ	ロコナダ・ハラメ	口縁直線片	13.6 (推定)	2.6 (推定)	3.4	2	
3 17号櫛 積石	土師器 積石	灰	ロコナダ・直筒形斜面・ハリ切長ナダ	ロコナダ	全体約1.6m 約1.6m	12.3 (推定)	8.0 (推定)	3.4	3	
4 17号中段 積石	土師器 積石	灰	ロコナダ・直筒形斜面・ハリ切長ロコナダ	ロコナダ	底部破片	10.8 (推定)	6.8 (推定)	4	4	
5 17号 積石	土師器 積石	灰	ロコナダ	ロコナダ	口縁直線片	10.2 (推定)	6.2 (推定)	5	5	
6 SE01	土師器 セイシ	灰	ロコナダ・ハラメ	ロコナダ・ハラメ	底部破片	8.8 (推定)	5.8 (推定)	6	6	
7 11号櫛 積石	土師器 積石	灰	ロコナダ・ハラメ・直筒形斜面ロコナダ	ナダ	底面破片	10.0 (推定)	7.0 (推定)	7	7	
8 SE01 サンブ	土師器 サンブ	灰	ロコナダ	ロコナダ	口縁直線片	11.4 (推定)	8.4 (推定)	8	8	
9 セイシ・七段	土師器 セイシ	灰	ロコナダ	ロコナダ	口縁直線片				9	

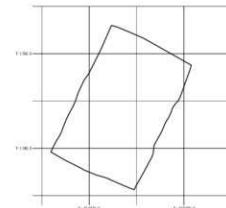
5. 須恵器長頸瓶  
(第6図5) 6. 須恵器長頸瓶  
(第6図6) 7. 須恵器壺  
(第6図7) 8. 黒色土器碗  
(第6図8) 9. 土器壺  
(第6図9)

## 1. 原遺跡（第15地点）

## B. 記録保存調査

## 1. 調査に至る経緯と調査方法

前述の確認調査に基づき6月23日開発者側と保存協議を行った結果、遺構・遺物が発見された1・2T周辺については、北側進入道路計画の位置変更が無理なため、道路部分14m<sup>2</sup>について記録保存の発掘調査を行うこととし、それ以外の場所については慎重工事とし、埋設管等の工事の際に立ち会うこととして、7月21日開発者側と発掘調査委託契約を結び、7月31日より現地調査に入った。



第7図 原遺跡（15地点）グリッド図

確認面精査を6日まで行った結果、確認調査時の井戸跡、小溝状遺構群、土坑の他に掘立柱建物跡が検出されたため、これら遺構の精査を12日まで行い、各遺構の実測、及び写真撮影を27日まで行い、全体写真を撮って、9月6日より重機による埋戻しを行い、8日に現地調査を終了した。

## 2. 発見された遺構

調査の結果確認した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱穴跡、井戸跡1基、小溝状遺構群、土坑3基である。

掘立柱建物跡は組み合わせの確実なのみで、他は柱穴跡とした。出土した遺物は、土師器、須恵器である。以下に各遺構種別ごとに概略を示す。

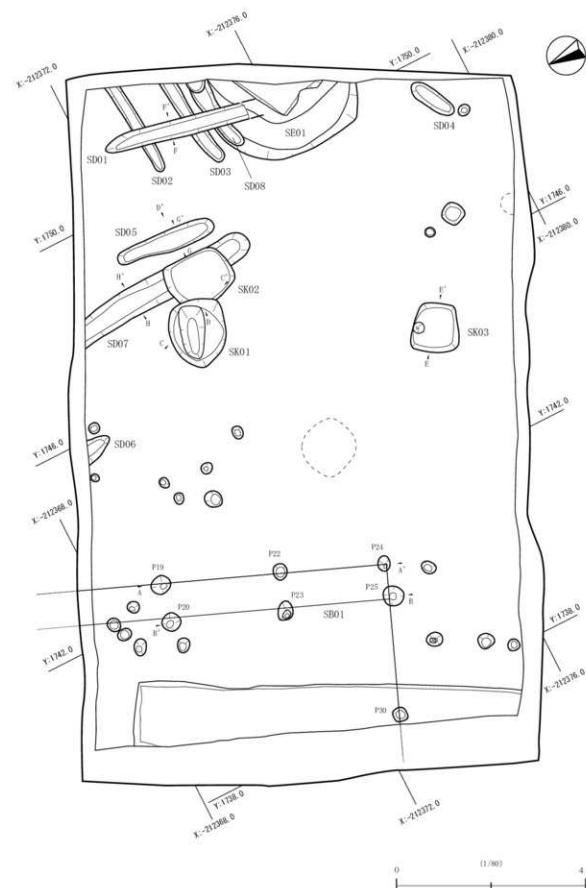
## 掘立柱建物跡

現段階で確実に組み合わせが確認され掘立柱建物跡とすることができるものはSB01の1棟のみである。

## 【SB01】

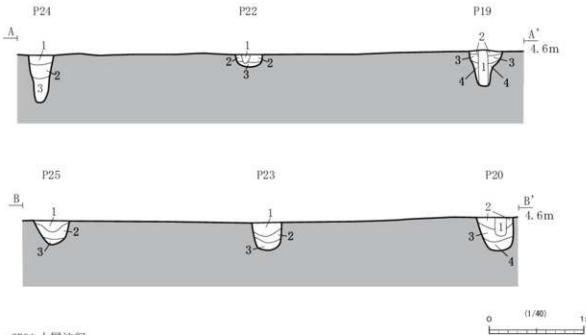
調査区北西に位置する。梁行2間以上、桁行3間以上で東側に庇の付く建物と推定される。調査区内では建物の一部が確認できたのみのため、全體の規模や形状は不明である。主軸方位は側柱の柱穴列でN-22°-Eである。柱穴跡の平面形はいずれも不整円形で、他の遺構とは重複していない。側柱の柱穴掘方の規模は31~38cmで、底の柱穴掘方の規模は26~35cmであり、若干ではあるが庇の柱穴掘方の規模の方が小さい。東西の柱間寸法は2.4m、南北の柱間寸法は2.3~2.5mである。掘立柱建物跡を構成するP19、P20、P22、P23、P24、P25、P30で半截を実施したところ、P19、P20、P22で柱痕跡が確認された。確認面から掘方底面までの深さは側柱の柱穴で26~36cmを測り、庇の柱穴で14~50cmを測る。遺物は、柱穴掘方埋土から若干の土師器甕と須恵器壺の小片が出土しているものの、図示できるものはなかった。他の遺構と重複しておらず、遺物も希薄であるが、周囲の遺構の年代観からSB01の年代は9世紀代と考えたい。

## 1. 原遺跡（第15地点）



第8図 原遺跡（15地点）全体図

## 1. 原遺跡（第15地点）



SB01 土層断面記

No.	土色	土質	備考	
1	褐色	10YR3/4	粘質シルト	
2	褐色	10YR4/4	シルト	
3	褐色	10YR4/4	シルト	
4	褐色	10YR3/3	シルト	
No.	土色	土質	備考	
P22	1 にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	
2 褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。	
3 褐色	10YR4/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを多量、炭化物を微量含む。	
No.	土色	土質	備考	
P24	1 褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少量、炭化物、土塊状を微量含む。
2 暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを多量、炭化物を微量含む。	
3 暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物を微量含む。	
No.	土色	土質	備考	
P20	1 褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物、土塊状を微量含む。
2 暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを多量、炭化物を微量含む。	
3 暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物を微量含む。	
No.	土色	土質	備考	
P25	1 褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物、土塊状を微量含む。
2 褐色	10YR4/4	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物を微量含む。	
3 暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。粘性弱い。褐色シルト小ブロックを少々、炭化物を微量含む。	

第9図 SB01 土層断面図

## 井戸跡

## 【SE01】

調査区東壁際に位置する。SD01、P31と重複し、それより古い。井戸の平面形状は方形で井戸枠をもつと推定されるが木質片は出土していない。また、井戸掘方の平面形状は遺構が調査区外に延びるために正確な形状は不明であるが、不整円形を呈するといられる。長軸5.4m、短軸2.4m以上、断

## 1. 原遺跡（第15地点）

面は箱形で確認面からの深さは1.0mである。本調査での遺物は、井戸内の堆積土から土器器窓の小片が1点出土したのみである。確認調査で出土した土器器窓や大戸窓の長頸瓶の年代観から9世紀前半頃と推定される。

## 溝跡

## 【SD01】

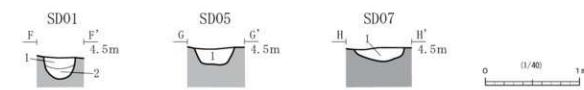
調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD02、SD03、SD08、SE01と重複し、それより新しい。軸方位はN=12° -E、確認全長3.1m、断面深皿形で、上幅0.3m、底幅0.2m、確認面からの深さは0.2mを測る。遺物は、堆積土から土器器窓や須恵器の小片が少量出土し、その中から須恵器1点を第1図に図示した。第11図の須恵器窓の底径は比較的小く、底部切り離し技法は回転系切後無調整で、器形は底部から内湾気味に立ち上がるところから、村田氏編年（村田1994）の3群土器に相当し、9世紀後半頃に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

## 【SD02】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD01と重複し、それより古い。また、SD03、SD08とほぼ平行する。軸方位はN=84° -E、確認全長2.0m、断面深皿形で、上幅0.4m、底幅0.2m、確認面からの深さは0.2mを測る。遺物は、堆積土から内面黒色処理の土器器窓小片がわずかに出土しているものの、図示できるものはなかった。重複するSD01の年代観が9世紀後半頃と推定され、重複関係からSD02はSD01より古いため、SD02の年代はおよそ9世紀前半頃と考えたい。

## 【SD03】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SD01と重複し、それより古い。また、SD02、SD08とほぼ平行する。軸方位はN=82° -E、確認全長2.0m、断面深皿形で、上幅0.4m、底幅0.2m、確認面からの深さは0.2mを測る。遺物は、堆積土から土器器窓や須恵器の小片がわずかに出土しているものの、図示できるものはなかった。



SD01 土層断面記

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト
2	褐色	10YR4/4	粘質シルト

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	しまり強い。粘性弱い。炭化物を少量、黄褐色粘土小ブロックを微量含む。

No.	土色	土質	備考
1	褐色	10YR4/4	粘質シルト

SD07 土層断面記

No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	しまり強い。粘性弱い。炭化物を少量、暗褐色シルト小ブロックを微量含む。

第10図 SD01・05・07 土層断面図

## 第II章 令和2年度年度の調査成果

### 1. 原遺跡（第15地点）

るもの、図示できるものはなかった。重複する SD01 の年代観が9世紀後半頃と推定され、重複関係からみて SD03 は SD01 より古いため、SD03 の年代はおよそ9世紀前半頃と考えたい。

#### 【SD04】

調査区南東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、他の遺構と重複関係はない。軸方位は N-63°-E、確認全長 1.0m、断面皿形で、上幅 0.3m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.1m を測る。遺物が出土しておらず、他の遺構との重複関係もないことから、年代は不明である。

#### 【SD05】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、他の遺構との重複関係はない。軸方位は N-5°-E、確認全長 2.1m、断面皿形で、上幅 0.4m、底幅 0.2m、確認面からの深さは 0.2m を測る。遺物は、堆積土から土師器と須恵器が少量出土し、土師器は内面に黒色処理が施されている。その中から須恵器 1 点を第 1 図に図示した。第 11 図 2 の須恵器壺の底径は比較的小さく、底部切り離し技法は回転ヘラ切り離し後にナデの再調整が施されている。器形は底部から内湾気味に立ち上がり、低平であることから田村氏編年（田村 1994）の 2 群土器に相当し、9 世紀前半頃に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

#### 【SD06】

調査区中央北壁際に位置し、南東から北西に延びる溝跡で、調査区内で確認できる部分はわずかである。他の遺構との重複関係はない。軸方位は N-10°-W、確認全長 0.6m、断面深皿形で、上幅 0.5m、底幅 0.3m、確認面からの深さは 0.3m を測る。遺物は出土せず、他の遺構との重複関係もないことから、年代は不明である。

#### 【SD07】

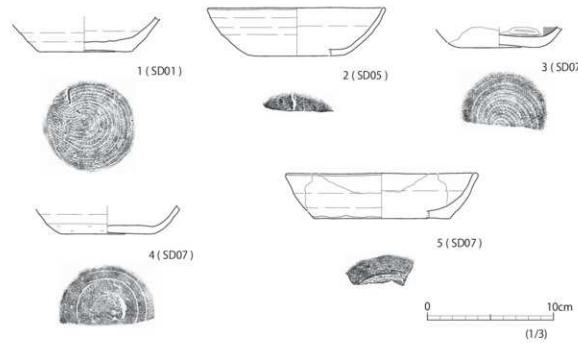
調査区北東に位置し、南東から北西に延びる溝跡で、SK02 と重複し、それより新しい。軸方位は N-3°-W、確認全長 3.9m、断面皿形で、上幅 0.5m、底幅 0.3m、確認面からの深さは 0.1m を測る。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器が出土し、その中から須恵器壺 2 点と土師器壺 1 点を第 1 図に図示した。第 11 図 3 の土師器壺はロクロで製作され、底径は比較的小さい。底部切り離し技法は回転糸切後無調整である。器形は底部から内湾気味に立ち上がり、内面には黒色処理が施されている。第 11 図 4 の須恵器壺の底径は比較的大きく、底部切り離し技法は回転ヘラ切り離し後に回転ヘラケズリの再調整が施されている。器形は底部から内湾気味に立ち上がる。焼成不良で、外面、内面ともに赤褐色である。第 11 図 5 の須恵器壺の底部切り離し技法は回転ヘラケズリの再調整が施されている。器形は底部から内湾気味に立ち上がり、低平である。これらの遺物の特徴から、田村氏編年（田村 1994）の 2 群土器に相当し、9 世紀前半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

#### 【SD08】

調査区北東に位置し、南西から北東に延びる溝跡で、SE01、SD01、P31 と重複し、SE01 より新しく、SD01、P31 より古い。また、SD02、SD03 とはほぼ平行する。軸方位は N-81°-E、確認全長 1.7m である。P31 に切られているため推定ではあるが、断面は深皿形、上幅 0.2 以上、底幅 0.1m 以上、確認面からの深さは 0.2m と推定され、一連の小溝状構造群で SD02 や SD03 と同規模と考えられる。遺物は出土していないものの、重複する SE01、SD01 の年代観から、SD08 は 9 世紀前半より新しく、9 世紀後半より古くと推定され、9 世紀半ば頃と考えたい。

## 第II章 令和2年度年度の調査成果

### 1. 原遺跡（第15地点）



第 11 図 SD01・05・07 出土遺物

## 土坑

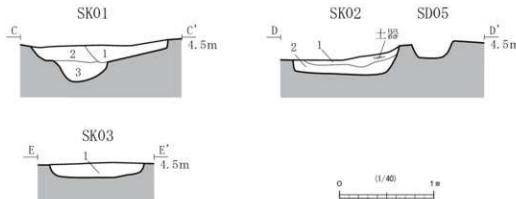
### 【SK01】

調査区北東側に位置し、SK02 と重複し、それより新しい。平面不整形形で東西 1.4m、南北 1.2m、断面は深皿形を呈するが、中位に段がある。確認面からの深さは 0.4m である。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器、ほかに土製品が出土し、その中から土師器の小型壺 1 点、須恵器長頸瓶 1 点、須恵器壺 1 点、土製品 1 点を第 13 図に図示した。第 13 図 1 の土師器の小型壺はロクロで製作され、底部切り離し技法は回転糸切後無調整である。器形は底部から直線的に立ち上がる。第 13 図 2 の須恵器壺の底部切り離し技法は回転ヘラ切り離し後ナデの再調整である。器形は底部から内湾気味に立ち上がる。第 13 図 3 の須恵器長頸瓶は、体部下半に斜方向へのラケズリが見られ、全体的につくりが粗雑である。第 13 図 4 の土製品は土鉢と推定され、手程ね成形である。須恵器壺の特徴から、田村氏編年（田村 1994）の 3 群土器に相当し、9 世紀後半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

### 【SK02】

調査区北東側に位置し、SK01、SD07 と重複し、それより古い。平面不整形形で東西 1.0m、南北 2.0m、断面皿形で確認面からの深さは 0.2m である。遺物は、堆積土から多量の土師器と少量の須恵器が出土し、その中から土師器の壺 2 点と須恵器壺 1 点を第 13 図に図示した。第 13 図 5・6 の土師器の壺は、ロクロで製作され、長胴形の壺と推定される。このうち 6 の外面には平行タキ目がみら

## 1. 原遺跡（第15地点）



SK01 土層注記

No.	土色	土質	備考
1	褐色	10YR4/4 砂質シルト	しまり強い、粘性弱い。にぶい黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3 シルト	しまり強い、粘性やや弱い。炭化物・焼土粒・暗褐色砂質シルトを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒を少量含む。

SK02 土層注記

No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	10YR3/4 シルト	しまり強い、粘性弱い。炭化物・焼土粒を多量、褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	褐色	10YR4/4 砂質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色粘土・暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。

SK03 土層注記

No.	土色	土質	備考
1	褐色	10YR4/4 シルト	しまり強い。粘性弱い。にぶい黄褐色シルト・灰黄褐色粘土小ブロックを少量、炭化物・焼土粒を微量含む。

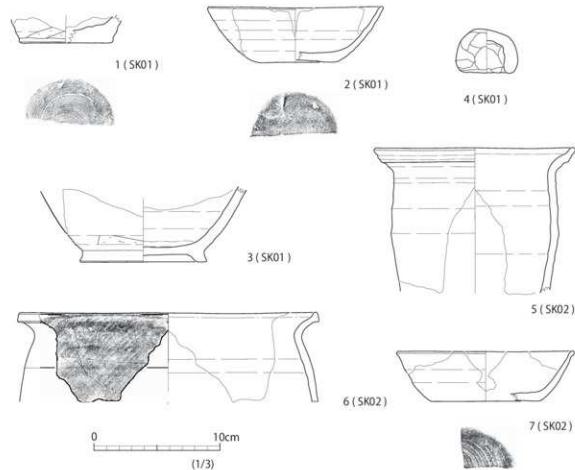
第12図 SK01・02・03 土層断面図

れる。第13図7の須恵器環の底径は比較的大きく、底部切り離し技法は回転糸切り離し後に回転ヘラケツリの再調整が施されている。器形は底部から内窓気味に立ち上がり、低平である。これらの遺物の特徴から、村田氏編年（村田 1994）の2群土器に相当し、9世紀前半に位置づけられる。そのため、遺構もその頃の年代と推定される。

## 【SK03】

調査区中央南側に位置し、他の遺構との重複はない。平面不整形で東西1.0m、南北1.0m、断面直角形で確認面からの深さは0.1mである。遺物は、堆積土から土師器と須恵器の小片がわずかに出土しているものの、図示できるものはなかった。土師器はクロロナイトで製作され、内面が黒色処理されているものを含むことから、周囲の遺構の年代観から9世紀代と考えたい。遺構もその頃の年代と推定される。

## 1. 原遺跡（第15地点）



第13図 SK01・02 出土遺物

番号	部類・層位	種別	器種	外 茗	内 茗	堆 積	形状(cm)		
							口径	厚 葵	
1	須恵器・海縁土	土師器	小型盤	ロクロナイト・ヘラケツリ・回転糸切り離し底・ハラナ	ロクロナイト	破損破片	(7.4)	—	4-9
2	SK01・海縁土	須恵器	HF	ロクロナイト・回転糸切り離し後無調整	ロクロナイト	全体1/3	13.9 (6.2)	4.4	4-6
3	SK01・海縁土	須恵器	長柄瓶	ロクロナイト・ヘラケツリ	ロクロナイト	破損破片	— (10.0)	—	4-8
4	SK01・海縁土	土製品	土鉢?	手削れ4.8cm、幅4.9cm、高さ3.5cm。	—	全体1/2	—	—	4-12
5	SK02・海縁土	土師器	小判盤	ロクロナイト	ロクロナイト～全体破片	(15.9)	—	—	4-10
6	SK02・海縁土	土師器	大型盤	ロクロナイト・平行切口目	ロクロナイト	口縁部破片	(33.2)	—	4-11
7	SK01・海縁土	須恵器	井	ロクロナイト・糸切り離し後回転ヘラケツリ	ロクロナイト	全体1/6	(14.1) (8.6)	3.9	4-7

## 1. 原遺跡（第15地点）

## 3.まとめ

原遺跡第15地点の調査では、6月10日から20日まで行われた確認調査と、7月31日から9月6日まで行われた記録保存調査によって、9世紀代につくられた東側に庇の付いた掘立柱建物跡1棟と井戸跡1基、溝跡8条、土坑3基、柱穴跡が確認された。遺跡内でのこれまでの調査成果は、JR常磐線の西側（以下、「線路東側」「線路西側」と表記）では第3次調査で発見された大型掘立柱建物跡を含む多くの掘立柱建物跡や堅穴建物跡などの遺構、及び遺物が発見されていたが、その東側の状況については調査実績が少なく、詳細は不明であった。しかし、令和元年度に線路の東側で実施された第4次調査や第12地点の調査によって、新たな知見を得ることができた。

原遺跡第4次調査は第15地点の200mほど南の地点で実施され、2時期の遺構面の存在が認められた。1面は9世紀前半以降に機能していたと考えられ、一辺が1.0m弱の方形の柱穴で構成される掘立柱建物跡3棟、溝跡3条、小溝状遺構群が確認されている。2面は8世紀代に機能していたと考えられ、一辺が1.0m弱の方形の柱穴で構成される掘立柱建物跡4棟、堅穴建物跡12棟、柱穴跡、土坑、溝跡が確認されている。第3次調査地点の北東に近接する位置で同時期の掘立柱建物跡が見つかったことで、線路東側にも遺構が広がることが判明した。中でも線路西側で掘立柱建物がみられなくなる9世紀代の掘立柱建物が確認されたことは、9世紀代に官衙的な遺構の中核が線路東側の地区に移動している可能性を示すものとなった（岩沼市教委 2020a）。

原遺跡第12地点の調査は、第15地点と第4次調査地点のほぼ中間の位置で実施され、7世紀末から9世紀前半頃につくられた堅穴建物跡8棟と大溝跡1条、溝跡12条、土坑6基、柱穴跡が確認されている。大溝は9世紀代まで機能し、10世紀前半頃に埋没した可能性があり、その外側（北側や東側）では遺構や遺物が極端に減少することが指摘されている（岩沼市教委 2020b）。

これら線路東側地区の調査成果の要点を整理すると、①第3次調査地に近接する第4次調査地では、線路西側では確認されていない9世紀以降の掘立柱建物の存在を確認、②第4次調査地、及び第12地点では、7世紀末から9世紀前半頃までの堅穴建物の存在を確認、③第12地点では7世紀後半から9世紀代まで機能した大溝が存在し、その外側（北側・東側）では生活の痕跡が希薄になることを確認、などの点が遺跡全体を俯瞰する際の重要な要素となる。

今回の調査で発見された遺構は、いずれも9世紀代に位置付けられるものである。一定間隔で平行に並ぶ溝跡は畑の歴跡と考えられ、畑の傍らには庇の付いた掘立柱建物が同時に存在していた可能性がある。また井戸には構築部材が残されていなかったが、桶方の形状から当該期の一般集落ではほんまられない井戸枠を伴っていたことが推定されるものである。このように、前述の第12地点で確認された大溝外側においても遺構・遺物が確認できたことは、駅家・刻などの官衙的な施設に近接した箇所での人々の営みの様子を知る手掛かりとなるものである。今後も本調査地周辺で調査を継続する中で、官衙的な施設に從事した人々の居住域や生産域を解明していくことが、施設の中核域の把握とともに重要な課題となる。

## 1. 原遺跡（第15地点）

写真図版 1



原遺跡 15 地点調査区遠景（北から）



原遺跡 15 地点調査区全景（真上から）

1. 原遺跡（第15地点）

写真図版  
2



原遺跡15地点調査区全景（西から）



SB01 掘立柱建物跡（南東から）



SB01 掘立柱建物跡（南から）



P19 南北セクション（東から）



P20 南北セクション（東から）

1. 原遺跡（第15地点）

写真図版  
3



SE01 井戸跡完掘状況（西から）



SD01・02・03 完掘状況（東から）



SK01・02・SD05・07 完掘状況（北から）



SK01・02・SD05・07 完掘状況（南から）



SK03 完掘状況（南から）

## 1. 原遺跡（第15地点）

写真図版 4



## 2. かめ塚古墳（第2次調査）

## 2. かめ塚古墳（第2次調査）

## A. 調査に至る経緯と調査方法

令和2年6月4日付けで県史跡かめ塚古墳、及びかめ塚西遺跡全域を含む地域での宅地造成計画に関する協議書が提出された。事業対象地内に県史跡を含むことから、7月7日に県教育委員会文化財課、開発事業者、市教育委員会生涯学習課の3者による現地協議が行われた。現地協議の結果、かめ塚古墳の墳丘には盛土貼付も含めて一切手を加えないこと、そして現在地表に顕在する墳丘は後世の耕地整理などによって大きく改変されていることが市史編纂事業に伴う第1次調査で明らかになったことから、旧墳丘の規模、周濠の範囲の把握が必要になるとの指導があった。

事業者側から示された事業計画では、かめ塚古墳を含めた

一帯は公園として整備することが盛り込まれていたが、より詳細な事業計画を策定する上では早急に保存する範囲を把握する必要があることから、かめ塚西遺跡の調査と同様に2か年に渡って調査を実施することとした。

令和2年度の調査は12月1日から開始した。今年度は事前に地権者から了解を頂いた地点で実施しているため、古墳の東部から南部にかけての範囲とした。調査は墳丘から放射状に幅3~5m、長さ20mトレンチを4箇所設定した後、重機を用いて水田耕作土の掘削を行った。その後、人力によつてにぶい黄褐色粘質シルトの上面で遺構精査を行い、周濠ラインの確認に努め、1トレントチと4トレントチでは周濠の一部で底面までの掘り下げを行った。また平面図や断面図作成、写真撮影などを随時実施した。調査が完了した1月24日以降に埋め戻し作業に入り、2月10日に完了した。

## B. 調査の概要

令和2年度のかめ塚古墳の調査目的は、保存範囲を策定するために必要な本来の墳丘形状・規模と、周濠の形状・規模の把握である。なお、平成24年度に市史編纂事業に伴って実施した調査では、後円部南東部より付帯施設が東へ延びることが確認されていることから、今回1トレントチに含めて再調査を実施している。以下に各トレントチの概要を記す。

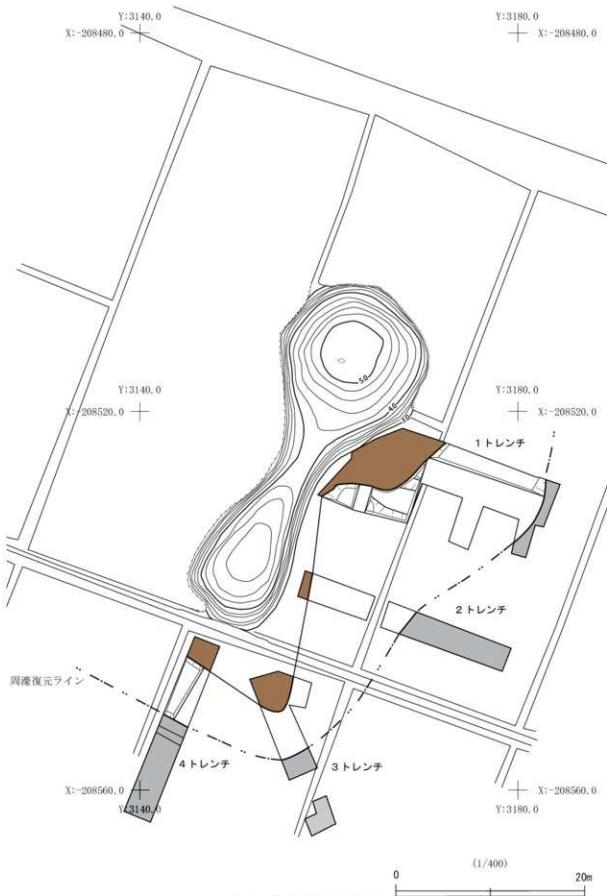
## 1トレントチ

1トレントチは東側くびれ部から後円部南側にトレントチを設定した。調査は12月1日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から40cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表面下30cmで確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。調査範囲のほぼ全域では後世の耕地整理の際に掘削を受けており、盛土はごく僅かに遺存するのみであったが、地山を削り出してくられた墳丘基底部は良好に確認でき、これにより本来の後円部端部は、現在の墳丘掘から5.60m東側に位置することが明らかとなった。同様にくびれ部付近についても現在の墳丘掘から1.52m東側に位置することが明らかとなった。確認された後円部の形状は、



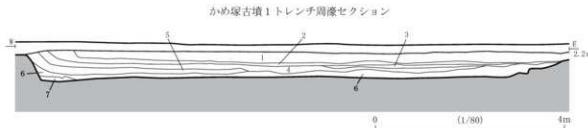
第14図 かめ塚古墳位置図(1/10,000)

## 2. かめ塚古墳（第2次調査）



第15図 かめ塚古墳全体図

## 2. かめ塚古墳（第2次調査）



かめ塚古墳1 トレンチ周塚セクション土層記

No.	上色	土質	備考
1	黒褐色	粘質シルト	粘性ややあり、酸化鉄を少許含む。
2	黒褐色	粘土	粘性やり、しまり強い。黄褐色粘土小ブロックを微量含む。
3	灰黄褐色	粘質シルト	粘性ややあり。しまり強い。黒褐色粘土小ブロックを多量、酸化鉄を微量含む。
4	灰黄褐色	粘質シルト	粘性ややあり。しまり強い。酸化鉄を多量、黄褐色粘土小ブロックを少々含む。
5	黒褐色	粘土	粘性ややあり。しまり強い。酸化鉄を多量、灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色	粘土	粘性ややあり。しまり強い。酸化鉄を多量、灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
7	灰黄褐色	シルト粘土	酸化鉄を多量、黒褐色粘土小ブロックをやや多く含む。

第16図 1 トレンチ周塚壁断面図

正円形の軌道とはならず、南東隅部がやや角張るような形態となるが、この箇所には東側に造り出しひみられる施設を設置していることが関係している可能性がある。

この造り出しとみられる施設は第1次調査の際に確認されたもので、当初は渡り土手の可能性を考えたが、今回の調査で延長線上に設定した拡張区では明瞭に認められなかったことから、ここでは造り出しの可能性が高いものとして理解しておく。この施設は調査によって確認した墳丘の上端からは20cm下に位置し、墳丘と同様に地山を削り出してつくられている。上幅は2.42～1.04m、基底部幅は4.50mで、緩やかに傾斜して周塚底面へと至る。なお、周塚底面からの高さは北側では30cm、南側では40cmを測る。これまでに確認した長さは5.04mであるが、さらに東側へ広がるために全長は不明である。

周塚はトレンチ北壁で計測すると、上幅11.24m、下幅9.76mを測る。確認した周塚の平面形態は、後部の形状に沿うような弧状を呈する。周塚外縁ラインを確認するために設定したサブトレンチでは、地山であるに亘る黄褐色粘質シルトが南側へ緩やかに傾斜していることが確認された。周塚底面の墳端から墳丘斜面の傾斜角度は66°とやや急傾斜であるが、周塚外縁にかけての傾斜角度は17°と緩やかとなっている。周塚底面は海拔1.56mでほぼ平坦であるが、墳端付近では若干低くなる。また、第1次調査で一木二又跡が底面より出土しているくびれ部付近の周塚底面海拔は1.52m前後である。周塚堆積土は黒色粘質土を主体とする自然堆積であり、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられる。

遺物は周塚堆積土上面の精査時に須恵器甕が出土している。また掘削及び精査時に須恵器杯、在地産の近世陶器瓶、砥石が出土している。

## 2 トレンチ

2 トレンチは前方部中央付近の東側にトレンチを設定した。調査は12月2日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から40cm下で確認したに亘る黄褐色粘質シルト上面。周塚外縁は現地表下50cmで確認したに亘る黄褐色粘土上面で精査を実施した。調査範囲のほぼ全域で後世の耕地整理の際に削平されており、盛土は認められなかつたが、現在の墳丘裾から2.20m東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。周塚外縁はこの墳丘

## 2. かめ塚古墳（第2次調査）

基底部から 11.42 m 東側で確認されている。周濠外縁ラインは北北東 - 南南西にかけて走り、前方部東側の墳丘線との間が徐々に狭まっていく様相がみられる。本トレーニングは周濠範囲の把握を目的とするため、周濠内の掘り下げを行っていないが、堆積土は黒色粘質土を主体とし、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられることを確認している。なお、周濠東側では 1 トレーニングから続く地山面の南側への傾斜により、水田耕作土下で暗褐色粘質シルトがやや厚く堆積することが確認された。遺物は出土していない。

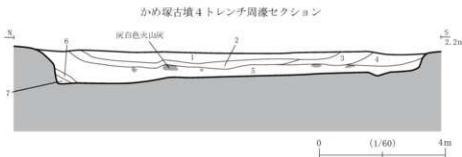
## 3 トレーニング

3 トレーニングは前方部南東角の位置を把握することを目的としてトレーニングを設定した。調査は 12 月 5 日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 20 cm 下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 30 cm で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。調査範囲のはば全城で後世の耕地整理の際に削平を受けており、盛土は認められなかつたが、現在の墳丘裾から 9.20 m 東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。周濠外縁はこの墳丘基底部から 4.94 m 東側で確認されている。周濠外縁ラインは北東 - 南西にかけて走り、これまで確認した中では墳丘線と周濠外縁が最も狭くなっている。本トレーニングは周濠内の掘り下げを行っていないが、他のトレーニングと同様に堆積土は黒色粘質土を主体とし、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられることを確認している。遺物は周濠堆積土層から頭部に波状文が施された須恵器大甕が出土している。

## 4 トレーニング

4 トレーニングは前方部南側にトレーニングを設定した。調査は 12 月 5 日から開始し、重機で水田耕作土の掘削を行った後、墳丘側では現地表面から 20 cm 下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面、周濠外縁は現地表下 30 cm で確認した明黄褐色粘土上面で遺構精査を実施した。調査範囲のはば全城で後世の耕地整理の際に削平を受けており、盛土は認められなかつたが、現在の墳丘裾から 5.02 m 東側では地山を削り出してつくられた墳丘基底部は良好に確認できた。

周濠外縁はこの墳丘基底部から 6.64 m 南側で確認されている。周濠外縁ラインは南東 - 北西に



第 17 図 4 トレーニング周濠土層断面図

No.	土質	土質	特徴
1	灰褐色	粘質シルト	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、酸化鉄を含む。古代遺物を混入する。
2	黒褐色	粘質シルト	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、酸化鉄を含む。古代遺物を混入する。
3	褐灰色	粘質シルト	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、酸化鉄を含む。
4	黒褐色	粘質シルト	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、酸化鉄を多量含む。
5	黒褐色	粘質シルト	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、上部付近に灰白色火山灰ブロックを含む。融化鉄跡見。
6	黒褐色	粘土	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、上部付近に灰白色火山灰ブロックを多量含む。
7	灰白色	粘土	粘性でやせ弱い、しまりやや弱い、黒褐色粘土ブロックを少含む。

## 2. かめ塚古墳（第2次調査）

かけて走り、墳丘線と並行している。周濠内に設定したサブトレーニングでは、周濠底面の墳端から墳丘斜面の傾斜は 84° の角度で立ち上がるが、中程からやや緩やかになる。周濠外縁にかけての傾斜は、60° とやや急傾斜である。周濠底面は外縁底面から墳端へかけて傾斜しており、墳端での海拔は 1.52 m となる。周濠堆積土は黒色粘質土を主体とする自然堆積であり、上層には灰白色火山灰がブロック状にみられる。その直上の黒色粘土層内では白色粘土の薄層がラミナ状を呈する。なお、周濠外側には周濠に沿うように上幅 80 cm の東西溝が存在しているが、部分的な確認のため古墳に伴う施設であるかは不明である。

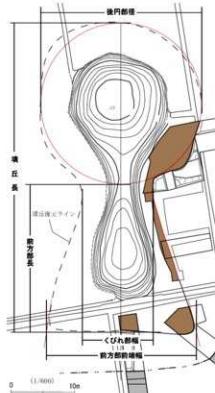
遺物は周濠内より非クロロ成形の土師器甕が出土している。また周濠部精査時に非クロロ成形の土師器甕、頸部に波状文が施された須恵器大甕が出土している。

## C. 小結

平成 24 年度に実施した市史編纂事業に伴う調査では、発掘調査によって墳丘基底部や周濠の存在を確認したことを受け、墳丘裾から放射状にラインを設定してボーリング調査を実施し、本来の地形や周濠範囲の把握を試みた。現在目に見えることができるかめ塚古墳の形状は柄鏡形の前方後円墳と表現されるが、ボーリング調査の結果では前方部前端が大きく開く、いわゆる「撥形」を呈することが考えられた。今回の調査ではこの前方部前端の形状が、ボーリング調査の成果と合致するのかという点も大きな目的であったが、結果としてはぼん想定通りの墳丘形状であることが確認された。以下に現時点で想定しうる墳丘規模の暫定値を示す。なお、相似する古墳の有無などについては全体の様相が判明した上で検討していくたい。

第 18 図は本来の墳丘の平面形状と暫定値を測定した箇所を示したものである。復元した墳丘主軸長は 48.5 m となる。ボーリングという調査の制約から後円部は正円形を描けるものではないが、後円部径は 26.1 m を測る。一方で前方

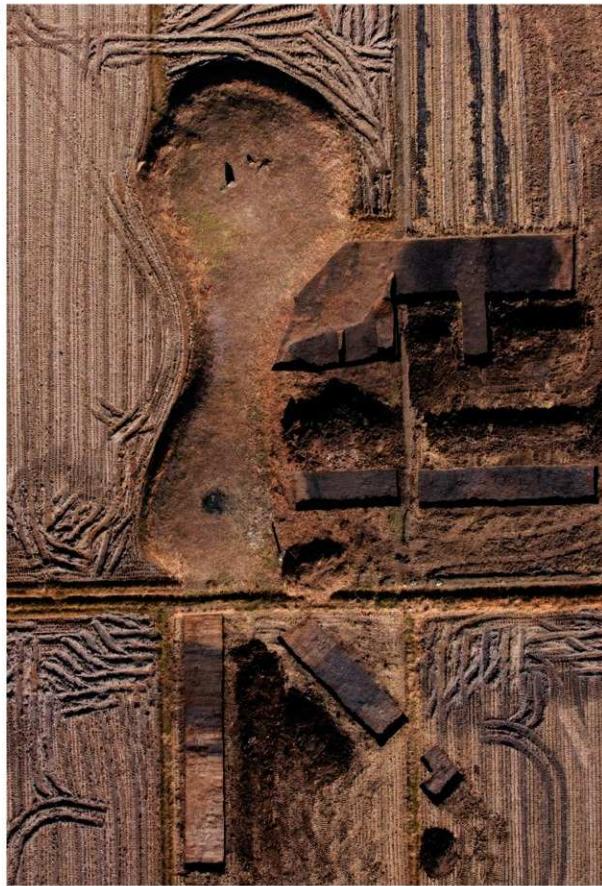
部長は 22.4 m となり、主軸長に対する前方部・後円部の占める割合は前方部 46.2% に対し、後円部 53.8% となる。前方部の前端幅は 23.3 m、くびれ部幅 11.2 m を測る。立面形態は後円部高さは 2.6 m (海拔 5.3 m)、前方部高さ 2.0 m (海拔 4.7 m) であり、後円部からくびれ部へ下り、わずかに前方部へと上る。古墳を築造する際に用いた尺度については、古墳時代前期の尺度が 1 尺 23.1 cm が基準として用いられている事例が多いことがこれまでに甘粕健氏によって明らかにされており、これを用いてみると墳丘主軸長は約 210 尺、後円部径は約 113 尺、前方部長は約 97 尺、前方部前端は約 100 尺、くびれ部は約 46 尺となる。しかしながら、奇数尺は基本的に左右対象となることが求められる後円部の設計で用いることが難しいと考えられることから、後円部径を 112 尺としたと仮定すると、1 尺は 23.3 cm となり、前方部長は約 96 尺、前方部前端は 100 尺、くびれ部は約 48 尺となる。以上のことからかめ塚古墳では、1 尺 23.3 cm の規格によって築造された可能性が高いと思われる。



第 18 図 カメ塚古墳の暫定値計測位置図

2. かめ塚古墳（第2次調査）

写真図版 1



かめ塚古墳空中写真（上空から）

2. かめ塚古墳（第2次調査）

写真図版 2



かめ塚古墳全景（南東上空から）



かめ塚古墳1 トレンチ・周濠断面（南東から）



かめ塚古墳2 トレンチ全景（東から）



かめ塚古墳3 トレンチ・前方部角（南から）



かめ塚古墳4 トレンチ全景（南から）

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

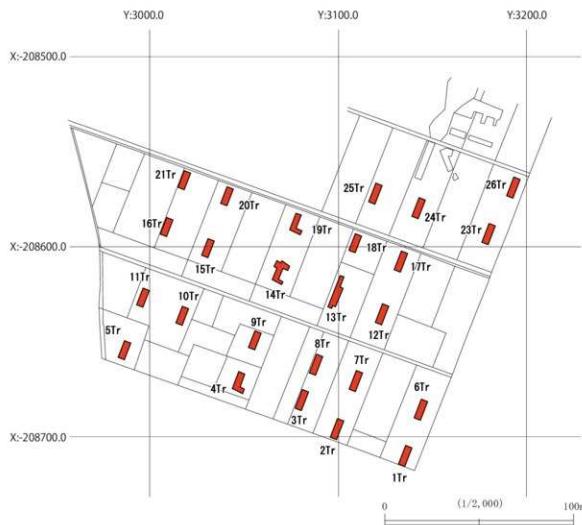
## A. 調査に至る経緯と調査方法

対象地はかめ塚西遺跡に位置する。遺跡内では遺物の採取は行われているが、発掘調査は実施されておらず、今回が第1次調査となる。

令和2年6月4日付けで県史跡かめ塚古墳、及びかめ塚西遺跡全域を含む地域での宅地造成計画に関する協議書が提出された。事業対象地内に県史跡を含むこと、また対象地内に周囲の埋蔵文化財の全域が含まれることから、7月7日に県教育委員会文化財課、開発事業者、市教育委員会生涯学習課の3者による現地協議が行われた。現地協議の結果、かめ塚西遺跡においては本調査が必要となる範囲等を把握することを目的とし、恒久的な構造物となる道路部分、及び調整池予定地で遺構・遺物の有無を確認するため



第19図 かめ塚西遺跡位置図(1/10,000)



第20図 かめ塚西遺跡トレント配置図

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

の確認調査を実施することになった。しかしながら、対象地では米作などの作付が行われており、収穫後に単年で63haにも及ぶ範囲の確認調査を実施することは極めて困難であることから、2か年に渡って調査を実施することとした。

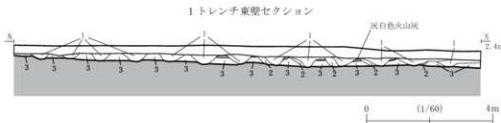
令和2年度の調査は11月18日から開始した。今年度は道路敷設予定範囲内東西3m、南北10mのトレントを26箇所設定し、重機を用いて水田・畑作耕作土の掘削をした。その後、人力によって褐色粘土、あるいはにぶい黄褐色粘質シルトの上面で遺構精査を行い、平面図や断面図、写真撮影などを随時実施した。調査が完了した1月24日以降に埋め戻し作業に入り、2月10日に完了した。

## B. 調査の概要

令和2年度のかめ塚西遺跡の確認調査について、以下に各トレントでの概要を記す。

## 1トレント

1トレントの調査は11月26日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から30cm下で確認されたにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西方向に広がる小溝状遺構群であるが、壁面観察では耕作時に火山灰の降下があり、直後に敵に土をかぶせている様子がみられる。遺物は出土していない。



1トレント東壁セクション層記述				
No.	上位	中位	下位	備考
1	黒褐色	0TR3/2	砂質シルト	粘性やや強め、しまりやや弱め、暗褐色・反復層合せ質シルト小ブロックを少量含む。
2	灰褐色	0TR4/2	砂質シルト	粘性弱め、しまりやや弱め、難化块をやや多く含む、灰白色火山灰を覆う。
3	褐褐色	0TR5/3	砂質シルト	粘性やや弱め、しまりやや弱め、地山を粒状に少量含む。

第21図 1トレント東壁土層断面図

## 2トレント

2トレントでの調査は11月27日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色粘質シルトを覆土とする小ビット2口である。遺物は精査時に須恵器甕が出土している。

## 3トレント

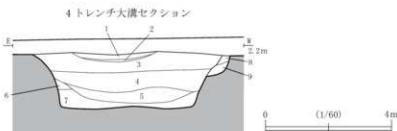
3トレントでの調査は11月27日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から25cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色シルトを覆土とする東西方向の溝跡である。覆土にはブロック状に灰白色火山灰を含んでいた。遺物は精査時に非クロコ形の土師器甕、クロコ形の土師器甕が出土している。

## 4トレント

4トレントでの調査は11月28日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から25cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒色粘質シルトを覆土とする南北方向の大溝跡、土坑、小ビットである。このうち、大溝跡は上幅3.10m、

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

下幅 2.06 m、深さ 82 cm を測る。覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は大溝の上層から非クロコ成形の土師器甕と手づくね土器、下層から非クロコ成形の土師器甕が出土している。また精査時には非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕が出土している。



第22図 4トレンチ土層断面図

No.	土色	土質	備考
1	黒色	10YR2/1 素土	粘性高い、しまりやや強い。
2	灰白色	10Y7/1 灰白色	十和田起源の火山灰。
3	灰白色	10Y7/2 素土	粘性高い、塑性高い、酸化熱を多く含む。炭酸カルシウムを微量含む。
4	黒褐色	10YR2/1 素土	粘性高い、塑性高い、酸化熱を多く含む。炭酸カルシウムを微量含む。
5	黒褐色	10YR2/1 素土	しまりやや強い、粘性高い、灰白色層へ・黒褐色へ・オリーブ色粘土小ブロックを少量含む。
6	暗褐色	10YR2/2 素土	しまりやや強い、粘性高い、酸化熱を多く含む。灰黃褐色粘土小ブロックを少く含む。
7	褐灰色	10YR4/1 素土	しまりやや強い、粘性高い、オリーブ色粘土小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR2/1 素土	しまり・粘性高い、灰黃褐色粘土小ブロックをやや多く、酸化熱を少く含む。
9	黒褐色	10YR2/2 素土	しまり・粘性高い、酸化熱を多く含む。

## 5 トレンチ

5 トレンチでの調査は12月1日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はいずれも黒褐色粘土シルトを覆土とするピット3口である。これらの覆土には褐色粘土小ブロックが少量含まれている。遺物は精査時に非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕が出土している。

## 6 トレンチ

6 トレンチでの調査は11月26日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から30 cm下で確認した灰黄褐色砂質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色シルトを覆土とする土坑1基である。遺物は出土していない。

## 7 トレンチ

7 トレンチでの調査は11月27日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から50 cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色粘質シルトを覆土とする大溝である。大溝は南東—北西方向に延びるもので、覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は出土していない。

## 8 トレンチ

8 トレンチでの調査は11月27日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。ここでは遺構は確認されず、また遺物も出土していない。

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

## 9 トレンチ

9 トレンチでの調査は11月28日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はすべて黒色粘質シルト褐色粘質シルトを覆土とする大溝と土坑である。また、中央より南側では明治期にこの地区一帯で瓦を生産していた時の粘土採掘坑と考えられる大規模な擾乱が存在する。大溝跡は前述の4 トレンチ、及び後述する14・19 トレンチで確認されたものと同一遺構の可能性がある。覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。遺物は掘削、及び精査時に非クロコ成形の土師器甕・甕、大堀相馬焼の碗が出土している。

## 10 トレンチ

10 トレンチでの調査は11月28日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構はすべて黒褐色シルトを覆土とする溝跡、土坑である。これらの遺構では、検出において灰白色火山灰はみられない。遺物は掘削、及び精査時に非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕、瀬戸美濃産染付碗が出土している。

## 11 トレンチ

11 トレンチでの調査は12月1日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から25 cm下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は黒褐色シルトを覆土とするビット2口である。これらの遺構では、検出において灰白色火山灰はみられない。遺物は掘削、及び精査時に非クロコ成形の土師器甕が出土している。

## 12 トレンチ

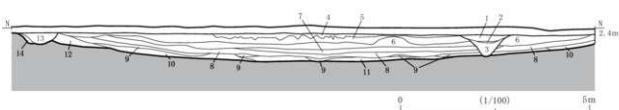
12 トレンチでの調査は11月19日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は土坑2基であり、うち1基は黒色粘質シルトを覆土とし、灰白色火山灰を粒状に含むものである。もう1基の覆土は暗褐色シルトで耕作土が混入する。遺物は出土していない。

## 13 トレンチ

13 トレンチでの調査は11月26日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20 cm下で確認した黒褐色・暗褐色シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は自然流路とみられる大溝と、これより新しい溝跡2条である。大溝はレンズ状に堆積するとみられ、覆土上層には灰白色火山灰が南東—北西にかけて広がる。確認した範囲での幅は約13 m、深さは80 cm下で確認した灰白色粘土層まで掘り下げている。最下部には灰色微粒砂と黑色粘土が互層状に堆積する。この大溝は走方向から7 トレンチで確認した大溝と同一遺構の可能性が高いが、これ以外のトレンチでは見られず、トレンチ間を蛇行している可能性がある。なお、この大溝より新しい東西溝では、上層に灰白色火山灰が最大8 cmの厚みをもって堆積する。遺物は溝内の堆積土中から非クロコ成形の土師器甕、須恵器甕が出土している。

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

13 トレンチ西壁セクション



13 トレンチ西壁セクション土層記

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10R2/2 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。酸化鉄を微量含む。
2	灰白色	5Y7/1 火成灰	十和田湖源火成灰。黒褐色粘土を少量含む。厚さは6cm。
3	灰褐色	10Y3/1 粘質シルト	しまり・粘性やや強い。灰褐色粘土とブロックを少量含む。
4	黒褐色	10R2/3 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。古代以降の水田耕作土か。灰白色火山灰ブロックを含む。
5	黒褐色	10Y3/1 粘質シルト	しまり・粘性やや強い。灰白色火山灰とブロックを少量化する。
6	黒褐色	10R2/2 粘質シルト	しまり・粘性やや強い。均質な土層。下位に酸化鉄を集積する。
7	黒褐色	10R2/3 粘質シルト	しまり強く、粘性やや強い。酸化鉄を少量含む。
8	灰褐色	5Y6/1 粘土	しまり・粘性と少極めて強い。黒褐色土を多く微量含む。
9	黒色	10R2/1 粘土	しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色粘土とブロックを少量化する。
10	灰黄褐色	10Y4/2 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色粘土とブロックをやや多く含む。酸化鉄を観察。
11	灰黄褐色	10Y4/2 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性やや強い。黒褐色粘土とブロックを少量化する。中心付近では黒褐色粗砂の塊を互層状に含む。
12	黒色	10R2/3 粘質シルト	しまり・粘性強い。灰白色粘土とブロックを少量含む。
13	黒色	10R2/2 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性強い。に高い黄褐色シルト小ブロックを少量化。
14	黒色	10Y2/1 粘質シルト	しまりやや弱く、粘性強い。に高い黄褐色シルトを粒状に微量含む。

第23図 13 トレンチ西壁断面図



13 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	外 面	内 面	残在	計量 (cm)	子鉢数
1	13Tr・P9 発現段	15 ロクロナダ・底面凹凸部切妻調整	コクロナダ		1.0	6.0 (3.1)	1-1

第24図 13 トレンチ出土遺物

## 14 トレンチ

14 トレンチでの調査は11月19日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20cm下で確認した褐色粘土上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に延びる大溝、そして大溝東側で並行して走る溝跡である。確認した大溝は幅3.0～3.5mで、黒色粘質シルトを覆土とする。確認面ではレンズ状に堆積するとみられる灰白色火山灰が大溝覆土の東西でみられる。遺物は大溝上面の精査時に非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器甕が出土している。

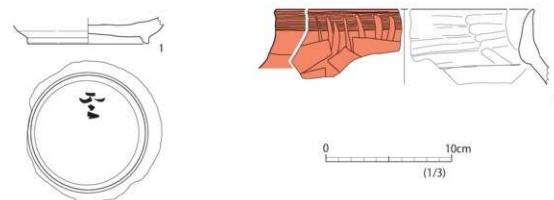
## 15 トレンチ

15 トレンチでの調査は11月24日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西方向に走る溝跡、土坑、ピットである。東西溝の上面には灰白色火山灰が堆積する。またピットでも覆土内に灰白色火山灰を小ブロック状に含むものがある。遺物は掘削、及び精査時に非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

16 トレンチ

16 トレンチでの調査は11月24日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は柱穴、土坑、小ピット多数である。このうち、一辺が80～100cmで長方形を呈するとみられる柱穴が2基あり、そこでは径15cmほどの柱痕跡がみられる。遺物は土坑内からは非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器壺、ピット内からは須恵器高台壺や赤彩が施された土師器甕が出土している。また掘削、及び精査時には非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器壺・甕、青磁瓶、志野焼皿、小野相馬産甕が出土している。



16 トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	面種	外 面		内 面		現存	計量 (cm)			写真番号
				口徑	底径	高さ	底径		口徑	底径	高さ	
1	16Tr・P9 発現段	16 土師器	高円錐	ハラギリ・凹面	ハラギリ・凹面	9.8	2.1	-	-	-	-	1-1
2	16Tr・P11 発現段	16 甕	高円錐	コロナダ・コロナダ	コロナダ・コロナダ	20.6	6.0	-	-	-	-	2-1

第25図 16 トレンチ出土遺物

17 トレンチ

17 トレンチでの調査は11月19日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から20cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は東西溝がある。この東西溝の上幅は約1.3m、深さは約20cmで、覆土は黒褐色粘質シルトであり、上層に灰白色火山灰が堆積する。遺物は溝内に堆積する灰白色火山灰下より須恵器甕が出土している。また掘削、及び精査時には瀬戸美濃產染付小壺が出土している。

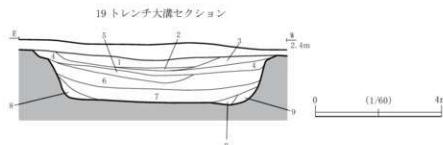
18 トレンチ

18 トレンチでの調査は11月25日から開始した。重機で耕作土の掘削を行った後、現地表面から70cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は土坑、ピットがある。遺物は掘削時に盛土中より非ロクロ成形の土師器壺・甕、須恵器蓋・甕、大堀相馬産の碗、小野相馬産の碗、在地産の近世陶器瓶が出土している。なお、本トレンチでは周辺の水田面により遺構確認面である褐色粘質シルトが高い標高で確認されたことから、昭和20～30年代に行われた耕地整理によって水田面では大きく削平を受けていたことが判明した。

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

## 19トレンチ

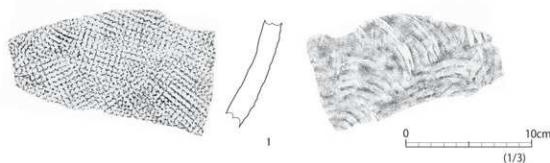
19トレンチでの調査は11月20日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から70cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に走る大溝跡、溝跡、ピットであり、遺構の覆土はすべて黒色粘質シルトである。大溝跡の覆土はレンズ状堆積とみられ、上層には灰白色火山灰が堆積する。大溝は幅3.5m、深さ1mであり、断面形状は箱状を呈する。南側の4・9・14トレンチから直線状に延びるものと考えられ、さらに北側へ展開する。なお、大溝の東側に並行して走る溝跡を確認しているが、こちらも14トレンチから延びるものと思われる。遺物は大溝の精査時に非クロロ成形の土師器甕、クロロ成形の土師器甕、須恵器蓋・甕、砥石が出土している。また覆土中からは非クロロ成形の土師器甕、須恵器甕・甕、不明土製品が出土している。



19トレンチ大溝セクション

No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	しまりやや固く、粘性やや高い。古代遺物を含む。
2	灰白色	5YR1/1 火山灰	十和田湖噴火の火山灰。黒色粘土を微混含む。
3	黒褐色	10YR3/1 粘質シルト	しまりやや固く、粘性やや高い。酸化鉄を含む。
4	褐灰色	10YR4/1 粘質シルト	しまりやや固く、粘性やや高い。酸化鉄を含む。
5	にぶい 黒褐色	10YR4/3 粘質シルト	しまり弱く、粘性やや弱い。黒褐色粘土小プロックを少量含む。
6	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	しまり・粘性強い。酸化鉄を含む。
7	オーリーブ黒色	5Y/3/1 粘土	しまり強く、粘性やや高い。明灰黄色粘土小プロックを少量含む。
8	黒褐色	10YR2/2 粘土	しまり・粘性強い。明灰黄色粘土小プロックをやや多く含む。
	褐灰色	10YR4/1 粘土	しまり・粘性やや高い。黒褐色粘土中プロックをやや多く含む。

第26図 19トレンチ土層断面図



19トレンチ出土遺物観察表

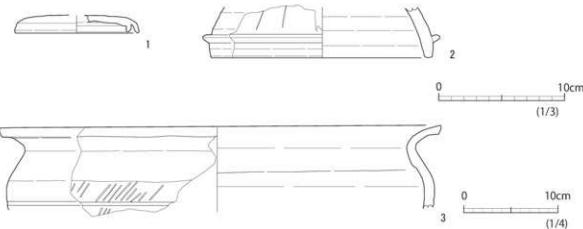
番号	地区・部位	種別	外 面	内 面	残存	出量 (cm)	平均高
1	19T+ 大溝 須恵器 甕	熱子目タタキ	同心円状の凸凹模	-	口径 底径 深さ	4-7	

第27図 19トレンチ出土遺物

## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

## 20トレンチ

20トレンチでの調査は11月25日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から70cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北方向に走る溝跡、土坑であり、遺構の覆土はすべて黒色粘質シルトであるが、検出時には灰白色火山灰はみられない。遺物は土坑内からは非クロロ成形の土師器甕のほか、東海地方で生産された可能性がある須恵器甕が出土している。また精査時には非クロロ成形の土師器甕・甕、須恵器蓋・甕・鉢・円面鏡が出土している。



20トレンチ出土遺物観察表

番号	地区・部位	種別	外 面	内 面	残存	出量 (cm)	平均高
1	20T+ 稲田 須恵器 甕	直	横縞ヘケタリ・ヨココマ	ロクロナガ・ヨコナダ・カニラ船付	1/4	11.8	1.43
2	20T+ 稲田 須恵器 甕	直面	ロクロナガ・突起船付	ロクロナダ	1/6	17.8	18.8
3	20T+ 稲田 須恵器 甕	鉢	ロクロナガ・平行タタキ・削いナガ	ロクロナダ	1/5	46.6	17.91

第28図 20トレンチ出土遺物

## 21トレンチ

21トレンチでの調査は11月25日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から70cm下で確認した褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝、東西溝、土坑であり、遺構の覆土は大部分が黒色粘質シルトである。検出時には灰白色火山灰はみられない。遺物は溝内からは須恵器甕、土坑からは非クロロ成形の土師器甕が出土している。また精査時には非クロロ成形の土師器甕のほか、東海地方で生産された可能性がある須恵器甕が出土している。

## 23トレンチ

23トレンチでの調査は11月18日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から30cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝がある。この溝跡の覆土は上層が暗褐色粘質シルトであるが、下層は黒色粘質シルトである。遺構の深さは確認面より約80cmほどを測る。なお、灰白色火山灰はみられない。遺物は出土していない。

## 24トレンチ

24トレンチでの調査は11月25日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から50cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかつた。なお、本トレンチは他のトレンチの堆積状況とは異なり、水田面の直下に黒色粘質シルト層が

## 3. かめ塙西遺跡（第1次調査）

10～20 cmの厚みをもって堆積していた。

## 25 トレンチ

25 トレンチでの調査は11月18日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から30 cm下で確認したにぶい黄褐色砂上面で遺構精査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。なお、本トレンチは水田耕作土の直下でみられる砂層が、他のトレンチよりやや厚く遺存していた。

## 26 トレンチ

26 トレンチでの調査は11月18日から開始した。重機で水田耕作土の掘削を行った後、現地表面から40 cm下で確認したにぶい黄褐色粘質シルト上面で遺構精査を実施した。発見した遺構は南北溝がある。遺構の覆土は上層が暗褐色粘質シルトであり、検出時には灰白色火山灰はみられない。溝の走行方向から23 トレンチで確認した南北溝と同一遺構であると考えられる。遺物は出土していない。

## C. 考察

## 遺物について

今回の調査では1～5、9～11、13～21 トレンチで遺物が確認されている。分布状況としては対象地西側ほど多い傾向にあると言える。また出土した遺物では非クロ成形の土師器が最も多く、次いで須恵器、ロクロ成形の土師器が多くみられる。なお、図示できなかった東海地方で生産された可能性がある須恵器については写真で示した。以下に図示した遺物を中心に出土遺物の概要を述べる。

出土した遺物の年代観は、最も古いもので第25図2の非クロ成形の土師器赤彩甕があり、6世紀前半頃とみられる。ただし、この時期の遺物はこの1点に留まる。第28図1の須恵器蓋は7世紀後半頃の年代観が考えられる。8世紀代とみられる遺物は第25図1の須恵器高台壺、第28図2の須恵器円面鏡がある。高台壺の高台内では墨書が認められるが、現時点で文字の判読はできなかった。また、円面鏡については縦方向の線刻がみられ、脚部には突帯が1条めぐる。9世紀代の遺物としては第24図1の須恵器壺がある。外底面は回転式切削無調整であり、底径が小さいことが特徴である。

## 遺構について

遺構の分布についても遺物と同様に、対象地西側で多く確認されている。特に4・9・14・19 トレンチにわたって確認された大溝を境として、確認される遺構の種類も異なる。

南北大溝は上幅3～4 m、下幅2～3 m、深さ1 mほどであることが、4・19 トレンチ内の掘り下げで判明している。堆積土はレンズ状を呈する自然堆積であり、いずれのトレンチでも最上層で灰白色火山灰の堆積を確認している。立面形態は逆台形、あるいは箱形である。最南端の4 トレンチ、最北端の19 トレンチは約100 m離れているが、同様の立面形状・土層堆積であることから同一の遺構である可能性が高い。なお、4・19 トレンチでは調査区外へ延びることが確認されていることから、全体の規模はさらに大きくなる。年代を明確に示す遺物は出土していないが、堆積土内から非クロ成形の土師器が出土していることを考慮すると、奈良時代頃の所産である可能性がある。

この大溝の東側では小溝状遺構群や東西溝が確認されているのに対し、西側では柱穴や土坑が多く確認されている。特に16 トレンチでは一辺が80～100 cmほどの長方形を呈する柱穴が複数存在しており、周辺には掘立柱建物跡が存在する可能性が考えられる。今回は小規模な調査のため全体像は不明であるが、円面鏡の出土や南北方向に直線的に延びる大溝などからは官衙的な遺構の存在も予見でき、対象地の西側については今後の調査の中で特に注視していく必要がある。

## 3. かめ塙西遺跡（第1次調査）



かめ塙西遺跡全景（南西上空から）



かめ塙西遺跡全景（南上空から）

3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

写真図版  
2



4 トレンチ大溝（北から）

3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

写真図版  
3



## 3. かめ塚西遺跡（第1次調査）

写真図版 4



1 須恵器・高台坏（第24図1）



2 土師器・赤彩壺（第25図2）



3 須恵器・高台坏（第25図1）



4 須恵器・円面鏡（第28図2）



5 須恵器・蓋（第28図1）



6 須恵器・鉢（第28図3）



7 須恵器・壺（第27図1）



東海地方で生産された可能性がある須恵器



(外面)

(内面)

## 4. 中ノ原遺跡（第1次調査）

## 4. 中ノ原遺跡（第1次調査）

対象地は中ノ原遺跡の中央部に位置している。地形的には岩沼西部丘陵の東麓に立地している。対象地の地目は荒地地である。現地調査の際には遺物の表探しはできなかった。

令和元年10月23日付けて駐車場造成工事に関する協議書が提出された。提出された計画では部分的に切土し、派生した残土を対象地北側の低湿地部に移動し、さらに碎石敷きの駐車場とするものであり、遺構・遺物が存在していた場合には遺跡へ与える影響が懸念された。このため、切土部分については事前に確認調査を実施することにした。

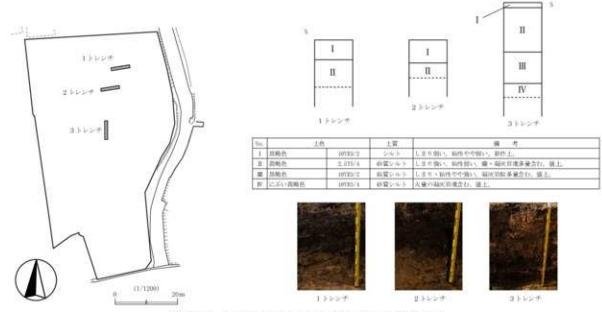
調査は令和2年1月14日に開始した。まず標高がやや高い対象地南側では東西1m、南北6mのトレンチを設定し(3トレンチ)、標高がやや下がる北側部分では東西6m、南北1mのトレンチを2箇所(北から1・2トレンチ)設定した。

1トレンチでは、重機を用いて根切り底となる現地表下50cmまで掘削した。確認できた土層は2層であり、I層は表土、II層は盛土であることが判明した。遺構・遺物は確認されていない。

2トレンチも根切り底となる現地表下40cmまで重機を用いて掘削したが、確認できた土層は1トレンチと同様であり、遺構・遺物は確認されていない。

一方、現在では標高がやや高い3トレンチでは、現地表下100cmまで重機を用いて掘削した。ここで確認した土層は4層に大別できたが、いずれも自然堆積ではなく盛土であることが確認された。遺構・遺物は確認されていない。

以上の結果から遺構記録作業、土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日中に埋戻しを行い、調査を終了した。



第30図 中ノ原遺跡トレンチ配置図・土層柱状図

## 5. 鵜ヶ崎城跡（第22地点）

## 5. 鵜ヶ崎城跡（第22地点）

鵜ヶ崎城跡は、岩沼西部丘陵より平野の沖積地に向かって東へ舌状に延びた段丘を利用して築かれた中世の城跡で、現在の鵜ヶ崎公園を中心に立地し、繩文・弥生時代の遺構・遺物も発見されている複合遺跡である。

対象地は遺跡範囲の西側に位置し、古絵図では下中屋敷と描かれている部分にあり、周辺ではこれまで住宅工事に伴う確認調査が随所で行われ、その範囲が丘陵下の平坦地にも及んでいることが明らかとなっている。

調査に至る経緯は、令和2年2月8日付けで個人住宅新築工事に関する協議書が提出され、現地調査では既存住居があつたため遺物の採取はなかったが、その建築工法が現地表の下に深さ6.5mまで鋼管杭を58本打ち込むものであることから、遺構・遺物が存在した場合、遺跡への影響が著しいと考えられるため、工事着手前に確認調査を実施する必要が生じたためである。

調査は令和2年6月9日を行い、建物建築予定範囲内の中に東西4m、南北2mのトレンチを1本設定し、重機を用いて表土である基礎埋土を掘削後、現地表面から125cm下までのI～V層を、順次重機と人力によって掘削及び精査を行った。

その結果、I層は暗褐色粘質シルトでほぼ水平に厚く堆積しているが、II層黒褐色粘質シルト、III層暗褐色粘質シルトは東半、IV層オーリーブ黒色粘土は西半に堆積し、何れも炭化物粒、黄褐色シルトブロックを含んでおり、V層は黒褐色粘土で酸化鉄分が散見していた。

表土の基礎埋土からは陶磁器細片と砥石が発見されたが、I層以下からは遺構・遺物共に発見されなかつたため、土層記録作業、写真撮影後に埋戻しを行い、同日調査を終了した。



空中写真（南から）



第31図 鵜ヶ崎城跡（22地点）位置図



I トレンチ完掘（南から）

I トレンチ南壁（北東から）

基本土層附記

No.	土色	土質	備考
<b>基礎埋土</b>			
I	暗褐色	10YR3/4 粘質シルト	炭火颗粒を微量含む。黄褐色シルト・小ブロックを含む。しまりなし。
II	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	炭火颗粒を微量含む。黄褐色シルト・小ブロックを少量含む。しまりやわらか。
III	暗褐色	10YR3/3 粘質シルト	炭火颗粒を微量含む。黄褐色シルト粒を微量含む。しまりあり。
IV	オーリーブ黒色	10YR3/1 粘土	炭火颗粒、黄褐色シルト・小ブロックを少量含む。しまりあまりなし。グライ化。
V	黒褐色	10YR2/2 粘土	酸化鉄分粒が散見する。しまりあり。

第32図 鵜ヶ崎城跡（22地点）トレンチ配置図・基本土層図

## 5. 鵜ヶ崎城跡（第22地点）

## 6. 下野郷館跡（第31地点）

## 6. 下野郷館跡（第31地点）

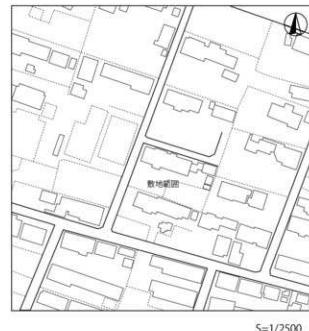
下野郷館跡は、本市の北東に位置する近世足軽集落の屋敷跡を中心に、古代・中世の遺物も出土している複合遺跡で、その立地は標高1m前後の自然堤防、浜堤に位置し、南には五間堀川が東流している。対象地は遺跡範囲の北側に位置し、東側には薬師堂・鹿島神社がみられるが、近隣では近年、宅地化や工業団地として工場等の立地が進んでおり、これらに伴う確認調査や県道の改良工事、河川改修工事に伴う発掘調査が実施されている。

調査に至る経緯は、令和2年5月13日付けて個人住宅建築替工事に関する協議書が提出され、地表面より約160cm下まで地盤改良を行う計画であり、これまでの調査で遺跡内の遺構確認面が深さ80~100cmであることから、遺構・遺物が存在した場合遺跡への影響が大きいものと考えられるため、既存建物の解体後、基礎工事着手以前に確認調査を実施することとした。

調査は令和2年7月2日に行い、建物建設予定範囲内に東西3m、南北2mのトレンチを設定し、重機・人力を用いて現地表面より50cmまでのI~III層を順次掘削及び精査を行った。その結果、I層の表土はコンクリート片などを多く含み、II層は黒褐色砂質シルト、III層にはぶい黄褐色砂質シルトで何れも大きく擾乱されており、II層中より相馬焼の碗・蓋細片が出土したが、遺構は確認されなかったため、土層の記録作業、写真撮影後に埋戻しを行い、同日調査を終了した。



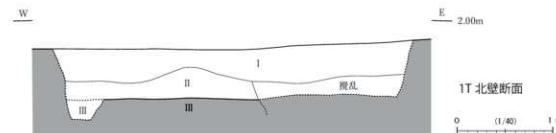
## 6. 下野郷館跡（第31地点）



1 トレンチ完掘 (南から)



1 トレンチ北壁 (南から)



基本土層注記

No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3 シルト	表土・コンクリート片などを含む。
II	黒褐色	10YR2/2 砂質シルト	微細粒砂を主体とし、炭化物を微量含む。しまりやや強い。遺物を混入。
III	にぶい黄褐色	10YR4/3 砂質シルト	砂利をごく微量含む。しまり強い。粘性やや弱い。

第35図 下野郷館跡（31地点）トレンチ配置図・基本土層図

## 7. 猫ヶ崎城跡（第23地点）

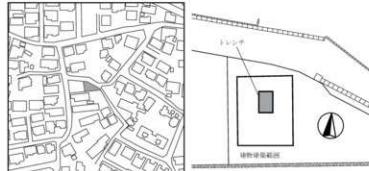
対象地は猫ヶ崎城跡内に位置する。地質的には二本・朝日丘陵から北側へ派生した尾根上、もしくは丘陵斜面に立地する。対象地周辺では平成16年に3地点で発掘調査が実施されているほか、丘陵頂部では東北福祉大学による調査が平成13～27年（2001～2015）にかけて実施され、これまでに中世の遺構・遺物、近世の区画溝などの遺構、17～19世紀後半にかけての遺物が出土している。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。

令和2年10月22日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は、現地表下5.5mまでのパイリ工法による地盤改良工事を行う計画であった。近隣で実施した

発掘調査では現地表面から20～40cm下で遺構が確認できる状況であり、これらの成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和2年12月2日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北4mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下40cmで確認されたIV層上面までを掘削した。調査ではIV層中で遺構精査を実施し、表土を覆土とする小ピットを1口確認した。また遺物は出土していない。

以上の結果から、本地点は近代以降の宅地化に伴って丘陵部分を大きく削平した箇所であると考えられた。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



調査地点位置図 (1/4,000)

トレンチ配置図

土層柱状図（北壁）

トレンチ土層注記

No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまり弱い、粘性やや弱い、表土。
II	褐色	10YR4/4 砂質土	しまり・粘性弱い、砂利・小礫を多量含む、底土。
III	黒褐色	10YR3/1 粘質シルト	しまり・粘性強い、凝灰岩小塊を少量、炭化物を微量含む。田表土。
IV	にぶい黄褐色	10YR7/2 砂質シルト	凝灰岩大塊を多量含む。

第36図 猫ヶ崎城跡（23地点）トレンチ配置図・土層柱状図

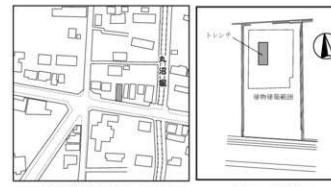
## 8. 猫ヶ崎城跡（第24地点）

## 8. 猫ヶ崎城跡（第24地点）

対象地は遺跡範囲の中央部東端付近に位置する。第38図に示しているように、本遺跡内ではJR岩沼駅の西側で調査事例が多く、駅東側での発掘調査は令和元年度に実施したAのみである。Aでは現地表面下約80cmで検出されたにぶい黄褐色粘質シルト上で古代～近世・近代の遺物、柱穴などの遺構が確認されている。この土層は調査範囲内ではほぼ平坦であるが、本丸前面に存在した堀へ向かって緩やかに傾斜していた。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、『下中屋敷』として描かれている部分の一画であり、東側には丸堀が南流している。

令和2年11月25日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提出された工法は当初はベタ基礎の予定であったが、その後の地盤調査の結果から軟弱地盤であることが判明し、地盤改良工事を行うこととなった。このため、前述のA地点での成果を踏まえると遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和2年12月24日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレンチを設定し、重機を用いて既存住宅の盛土を除去したところ、現地表下40cmでIV層を確認した。ところがIV層中からガラス片などが得られたため、さらに現地表下100cm掘削を継続した。しかしながら、層位の様に変化が認められず、さらに下位の様子を探るべく設定したサブトレンチにおいても同様の結果が得られたことから、IV層は規模な客土であることが明らかとなった。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



調査地点位置図 (1/4,000)

トレンチ配置図

土層柱状図（西壁）

No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまり弱い、粘性弱い、表土。
II	褐色	10YR3/3 砂質シルト	しまりやや弱い、粘性やや強い、瓦礫・陶器を多量含む。
III	黒褐色	10YR2/3 粘質シルト	しまり・粘性やや強い、炭化物を少量含む。ガラス・陶器を混入。
IV	黒褐色	10YR2/2 粘質シルト	しまりやや弱い、炭化物・焼土粒多量含む。陶器・ガラスを混入。

第39図 猫ヶ崎城跡（24地点）トレンチ配置図・土層柱状図

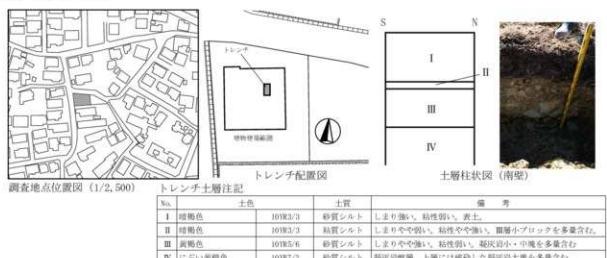
## 9. 鶴ヶ崎城跡（第25地点）

対象地は遺跡範囲の北西部に位置し、第23地点に隣接する。この周辺では平成16年度に第2・3地点、平成30年度に第19地点の調査が行われている。特に第3地点の調査では、複数の小規模な掘立柱建物と溝跡が発見されているが、溝は建物内から延び、また覆土中には魚骨などの食物残滓が見られたことから、台所の可能性も考えられている（岩沼市教委2004c）。第19・23地点では、近現代に二木・朝日丘陵から北へ生産する尾根を削平した痕跡が確認できたのみであり、遺構・遺物はみられない。なお、協議対象地は『名取郡岩沼郷館井下絵図』（宮城県図書館所蔵）など現存する江戸時代に描かれた古絵図を見ると、「下中屋敷」として描かれている。

令和2年12月9日に個人住宅建築に関する協議書が提出された。提供された工法は、現地表下5.0mまでの柱状改良工法による地盤改良工事を行う計画であった。前述のおり第19・23地点では遺構・遺物は確認できなかったが、第3地点では現地表面から20~40cm下で遺構が確認できる状況であったことから、遺構・遺物が遺存していた場合に遺跡へ与える影響は大きいと想定されたことから、工事着手以前に確認調査を実施することとなった。

調査は令和3年2月12日に開始した。まず建物建築予定範囲内に東西2m、南北3mのトレンチを設定し、重機を用いて現地表下30cmで確認されたⅢ層上面までを掘削した。ここでは表土を覆土とする小ピットが1口確認されたが、遺物は発見されなかった。その後、現地表面下70cmまでの掘り下げを行ったが、凝灰岩が基盤とする岩盤面が確認できたのみであった。

以上の結果から、本地点も第23地点同様に近代以降の宅地化に伴って丘陵部分を大きく削平した箇所であると考えられた。このため土層記録作業、写真撮影を実施した後、同日に埋め戻しを行い、調査を終了した。



第40図 鶴ヶ崎城跡（25地点）位置図

## 【引用・参考文献】

- 生和宏 2003 「城柵官衙道路における陶礎の様相 - 多賀城を中心として -」『古代の陶礎をめぐる諸問題 - 地方における文書行政をめぐって -』奈良文化研究所
- 岩沼市史編纂委員会 1984 『岩沼市史』岩沼市
- 岩沼市教育委員会 2004a 『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡・第2地点』岩沼市文化財調査報告書第3集
- 岩沼市教育委員会 2004c 『鶴ヶ崎城跡・第3地点』岩沼市文化財調査報告書第4集
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2018a 『原道跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第19集
- 岩沼市教育委員会 2018b 『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第20集
- 岩沼市教育委員会 2019a 『原道跡第3次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第21集
- 岩沼市教育委員会 2019b 『原道跡調査報告書1』岩沼市文化財調査報告書第22集
- 岩沼市教育委員会 2020a 『原道跡第4次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第24集
- 岩沼市教育委員会 2020b 『原道跡調査報告書2』岩沼市文化財調査報告書第25集
- 岩沼市教育委員会 2021a 『原道跡第1次調査ほか』岩沼市文化財調査報告書第26集
- 岩沼市教育委員会 2021b 『原道跡第5次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第27集
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 岩沼市史編纂委員会 2018 『岩沼市史』第1巻 通史編I 原始・古代・中世
- 閑根 章義 2014 「古代陸奥国における陶礎の受容と展開 - 城柵官衙道路を中心として -」季刊『古代文化』第66巻第3号 古代学協会
- 千葉 宗久 2015 『Ⅱ、4-1 かみ塙古墳』『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古
- 辻 伸人編 2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北大学院大学文学部 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 『鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）』第10次発掘調査報告書
- 宮城県教育委員会 1981 「長者原貝塚・上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 1993 『北原道跡』宮城県文化財調査報告書第159集
- 宮城県教育委員会 1996 『山王道跡Ⅰ-多賀前地区考察編』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 1997 『山王道跡V-第2分冊(伏石地区・考察)』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会 2018 『山王道跡Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮城県多賀城跡調査研究会 1985 『宮城県多賀城跡調査研究年報1984 多賀城跡』
- 宮城県多賀城跡調査研究会 2013 『多賀城跡木簡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究会資料Ⅲ
- 村田 晃一 1994 「土器からみた官衙の終末 - 東北地方の場合 -」『古代官衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊問題提起・各地方の概要』東日本理叢文化財研究会
- 村田 晃一 2007 『V、宮城県中部から南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北大学院大学文学部
- 村田 晃一 2018 『陸奥中部における陶礎の生産と消費（1）』『宮城考古学』第20号 宮城県考古学会

# 報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつくちょうさまうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	3							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 28 集							
編集者名	川又文恵・武田裕光・兼田芳宏							
編集機関	岩沼市教育委員会							
所在地	〒980-2480 岩城町岩沼市原 1 丁目 6 - 20 TEL(0223) - 22 - 1111							
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号		° ′ ″	° ′ ″		m <sup>2</sup>		
原遺跡	岩沼市南谷字原	42111	15053	38.05.12	140.51.11	2020.06.10 ～ 2020.06.20 ・ 2020.07.31 ～ 2020.09.08	60 m <sup>2</sup> • 148 m <sup>2</sup>	宅地造成
かめ塚古墳	岩沼市字龜塚	42111	15001	38.07.17	140.52.09	2020.12.01 ～ 2021.02.10	340 m <sup>2</sup>	範囲確認
かめ塚西遺跡	岩沼市字龜塚	42111	15002	38.07.14	140.52.06	2020.11.18 ～ 2021.02.10	750 m <sup>2</sup>	宅地造成
中ノ原遺跡	岩沼市三色吉字雷神	42111	15054	38.07.14	140.50.32	2020.01.14	18 m <sup>2</sup>	駐車場 造成
鶴ヶ崎城跡	岩沼市大ケ崎二丁目	42111	15023	38.06.47	140.51.41	2020.06.09	8 m <sup>2</sup>	個人住宅
下野郷跡	岩沼市下野郷字新井外	42111	15040	38.07.29	140.54.14	2020.07.02	6 m <sup>2</sup>	個人住宅
鶴ヶ崎城跡	岩沼市大ケ崎一丁目	42111	15023	38.06.55	140.51.43	2020.12.02	8 m <sup>2</sup>	個人住宅
鶴ヶ崎城跡	岩沼市大ケ崎二丁目	42111	15023	38.06.43	140.52.00	2020.12.24	6 m <sup>2</sup>	個人住宅
鶴ヶ崎城跡	岩沼市大ケ崎一丁目	42111	15025	38.06.55	140.51.42	2021.02.12	6 m <sup>2</sup>	個人住宅
所収遺跡	種別	主な時代	主な貴備	主な遺物	特記事項			
原遺跡	官衙閑連施設 集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	掘立柱建物跡 井戸跡 遺跡	土師器 須恵器	平安時代の井戸跡を発見。			
かめ塚古墳	古墳	古墳	墳丘 周濠	須恵器	墳丘は地表でみられる墳丘よりも規模が大きくなることを確認。また周濠の一部の規模を確認。			
かめ塚西遺跡	散居地	弥生・古墳・古代	大溝 柱穴 土坑	土師器 須恵器 石製品	100 m 以上に延びる大溝を確認。 また方形の施方を有する柱穴を確認。			
中ノ原遺跡	集落跡	中世	なし	なし	なし			
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城跡	漢文・弥生・中世・近世	なし	なし	なし			
下野郷跡	集落跡	古代・中世・近世	なし	なし	なし			
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城跡	漢文・弥生・中世・近世	なし	なし	なし			
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城跡	漢文・弥生・中世・近世	なし	なし	なし			
鶴ヶ崎城跡	集落跡・城跡	漢文・弥生・中世・近世	なし	なし	なし			
要約	玉前家閑連施設でみられる原遺跡では、遺跡の北縁で実施した第 15 地点の調査において、平安時代の井戸跡と掘立柱建物跡を発見した。掘立柱建物は小規模なものであるが、東側に庇を有するものとみられる。宮城城史跡であるかめ塚古墳では、周辺の宅地造成計画においての保存範囲を把握するための調査を填丘南東部で実施し、本来の墳丘形状・規模の一端が明らかとなった。また周濠の外郭も確認されている。かめ塚西遺跡は宅地造成計画の範囲に含まれていることから、道路敷設が予定される箇所で調査を実施し、東縁に南北 100 m 以上に延びる大溝の存在を確認した。							

岩沼市文化財調査報告書第 28 集  
市内遺跡発掘調査報告書 3

令和 3 年 3 月  
発行 岩沼市教育委員会  
岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号  
生涯学習課 TEL0223(22)1111 内線 573  
印刷 株式会社 国井印刷  
岩沼市藤浪 1 丁目 4 番 35 号  
TEL0223(22)2221